

三木市

御坂遺跡

—県道三木三田線特殊・改良一種事業に伴う
埋藏文化財発掘調査報告—

1994年

兵庫県教育委員会

三木市

み さか
御 坂 遺 跡

— 県道三木三田線特殊・改良一種事業に伴う
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 —

1994年

兵 庫 県 教 育 委 員 会

例 言

1. 本報告書は、三木市志染町御坂に所在する、御坂遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、県道三木三田線特殊・改良一種事業に伴うもので、兵庫県社土木事務所の委託を受けて、平成2年度から3年度にかけての3次にわたって兵庫県教育委員会が調査を実施した。
3. 現地における調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。遺跡調査番号および担当者は以下のとおりである。

平成元年度	現地立会（890136）	池田正男・西口圭介
平成2年度	全面調査（900007）	西口圭介・中村 弘
平成3年度	確認調査（910050）	村上賛治・西口圭介
平成3年度	全面調査（910124）	吉誠雅仁・甲斐昭光
4. 整理作業は、平成5年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所および魚住分館において実施した。作業には、嘱託員等の協力のもと、主に西口・甲斐・中村があたった。
5. 調査現場での遺構等の実測・写真撮影は、調査員および調査補助員が行った。
6. 本書の執筆は本文目次に記したとおり分担し、図集は甲斐が行った。
7. 本報告にかかる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水字立合池ノ下650-1）に、写真および図面は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5）に保管している。

凡 例

1. 本書で示す標高値は東京湾平均海水準を基とし、方位は座標北を指す。なお、調査地の国土地標は第V系に属する。
2. 第2図で用いた地図は、国土地理院が昭和57年に発行した1/50,000地形図「神戸」を使用したものである。
3. 遺物は本書掲載順に通し番号を付けている。ただし、石器・金属器については番号の頭に、それぞれS及びMを付けて土器と区別している。また、遺物の番号は、本文・挿図・図版とともに統一している。
4. 土器の実測図の断面を以下のように区別することによって、種類の違いを表現している。
土師器—白抜き / 須恵器—黒塗り / 陶磁器—網かけ

本文目次

第1章 はじめに (中村 弘) 1	第4章 平成3年度の調査 17
第1節 調査の経緯 1	第1節 確認調査 (西口圭介) 17
第2節 調査と整理の体制 2	第2節 C地区の調査 (甲斐昭光) 18
第2章 位置と環境 (中村) 3	1. 調査区の概要
第1節 地理的環境 3	2. 層序
第2節 歴史的環境 5	3. 遺構
第3章 平成2年度の調査 8	第3節 D地区的調査 (甲斐) 21
第1節 A地区的調査 (中村) 8	1. 調査区の概要
1. 調査区の概要	2. 層序
2. 層序	3. 遺構
3. 遺構	第4節 E地区的調査 (甲斐) 23
第2節 B地区的調査 (中村) 10	1. 調査区の概要
1. 調査区の概要	2. 層序
2. 層序	3. 遺構
3. 遺構	第5節 遺物 (甲斐) 25
第3節 遺物 (中村) 13	第5章 まとめ (甲斐) 32

挿図目次

第1図 調査区周辺地形図 3	第8図 A・B地区 出土遺物(1) 14
第2図 周辺遺跡分布図 4	第9図 A・B地区 出土遺物(2) 15
第3図 調査区位置図 7	第10図 A・B地区 出土遺物(3) 16
第4図 A地区 平面図・土層断面図 9	第11図 C地区 上層遺構面
第5図 石器実測図 10	平面図・土層断面図 19
第6図 B地区 平面図・土層断面図 11	第12図 C地区 土壙1 20
第7図 B地区 溝1・2土層断面図 12	第13図 C地区 下層遺構面平面図 20

第14図	D地区	平面図・土層断面図	21	第20図	E地区	土壤3出土遺物	27
第15図	D地区	溝1・2土層断面図	22	第21図	E地区	土壤4出土遺物	27
第16図	E地区	平面図・土層断面図	24	第22図	E地区	土壤5出土遺物	28
第17図	C地区	上層遺構面出土遺物	25	第23図	E地区	近世堆積層出土遺物(1)	28
第18図	D地区	溝1・2出土遺物	25	第24図	E地区	近世堆積層出土遺物(2)	29
第19図	E地区	土壤1出土遺物	26	第25図	D・E地区	出土鉄器	30

写真図版目次

カラー図版 1 A・B・E地区 出土遺物

- (上) A・B地区 出土遺物
 (下) E地区 土壤3・4・5出土遺物

カラー図版 2 E地区 出土遺物

- (上・下) 近世堆積層出土遺物

図版 1 遺跡の遠景

- (上) 空中写真 (南から)
 (下) 空中写真 (東から)

図版 2 A地区 遺構

- (上) 中世遺構面全景 (西から)
 (下) 弥生時代遺構面全景 (西から)

図版 3 B地区 遺構

- (上) 全景 (東から)
 (下) 全景 (西から)

図版 4 B地区 遺構

- (上) 溝1 (南東から)
 (下) 溝2 (南西から)

図版 5 C・D・E地区 空中写真

- (上) C・D地区 全景
 (下) E地区 全景

図版 6 C地区 遺構

- (上) 上層遺構面東半部全景 (西から)
 (下) 上層遺構面近景 (北西から)

図版 7 C地区 遺構

- (上) 下層遺構面全景 (西から)
 (下) 下層遺構面近景 (北東から)

図版 8 D地区 遺構

- (上) 全景 (東から)
 (下) 溝1土層堆積状況 (南東から)

図版 9 D・E地区 遺構

- (上) D地区 溝2土層堆積状況 (南西から)
 (下) E地区 全景 (西から)

図版 10 A・B地区 遺物

- (上) 弥生時代の遺物
 (下) 中世の遺物

図版 11 D・E地区 遺物

- (上) D地区 溝2出土土器
 (下) E地区 土壤1出土土器

図版 12 C・E地区 遺物

- (上) 鉄釘
 (下) 鋸・鋤先

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

御坂遺跡は1982年3月に文化庁文化財保護部から出版された『全国遺跡図録 兵庫県』に24—192御坂遺跡第1地点、24—193御坂遺跡第2地点として周知されていた。その後、昭和63年度、平成元年度には、兵庫県三木土地改良事務所による志染地区県営圃場整備事業に伴い確認調査及び現地立会が実施されている。この調査では遺構は検出されていないが、弥生時代後期の遺物が出土している（『昭和63年度社会教育活動状況報告書』『平成元年度社会教育活動状況報告書』三木市教育委員会）。

今回の発掘調査は、兵庫県社土木事務所による県道三木三田線特殊・改良一種事業に伴うもので、兵庫県教育委員会との協議の上で行われた。調査地点により大きく、A・B地区と、C・D・E地区の2地点に分かれる。

A・B地区 三木市教育委員会から教示を受け工事立会を行った結果、弥生時代と中世の遺構、及び包含層が確認された（遺跡調査番号890136）。そこで、平成元年11月27日に現地にて兵庫県教育委員会と兵庫県社土木事務所の両者で協議を行い、平成2年6月～7月に当該地区的全面調査を行うこととなった（遺跡調査番号900007）。

C・D・E地区 同じく道路改良工事の延長上において、遺物が散布し、また周囲の地形や式内社の御坂神社が立地することから、遺跡の存在が推定される地点があったため、平成3年度4月、5月に確認調査（遺跡調査番号910050）を実施した。その結果、3地区で遺構が確認されたため、それを受け同年度の平成4年1月～2月にかけて全面調査を実施した（遺跡調査番号910124）。



A地区から西方を見る

第2節 調査と整理の体制

1. 調査の体制

発掘調査は、兵庫県社土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（調査第2課担当）が平成2年度から平成3年度にかけての3次にわたって実施した。調査期間、遺跡調査番号、担当者の職氏名は以下の通りである。

調査期間	調査地点	調査の種類	遺跡調査番号	調査担当者
平成元年11月27日	A・B 地区	工事立会	890136	課長 池田 正男 技術職員 西口 圭介
平成2年6月13日～ 7月17日		全面調査	900007	技術職員 西口 圭介 技術職員 中村 弘
平成3年4月11日～ 5月8日	C・D・ E地区	確認調査	910050	主任 村上 賢治 技術職員 西口 圭介
平成4年1月6日～ 2月14日		全面調査	910124	主査 吉識 雅仁 技術職員 甲斐 昭光

2. 整理の体制

整理作業は兵庫県社土木事務所の協力のもと、平成5年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所及び同魚住分館において行った。整理作業には以下の職員があたった。

一職員一

主査 吉識 雅仁
主査 加古 千恵子
(鉄器処理担当)
主任 西口 圭介
技術職員 甲斐 昭光
技術職員 中村 弘

一非常勤嘱託員一

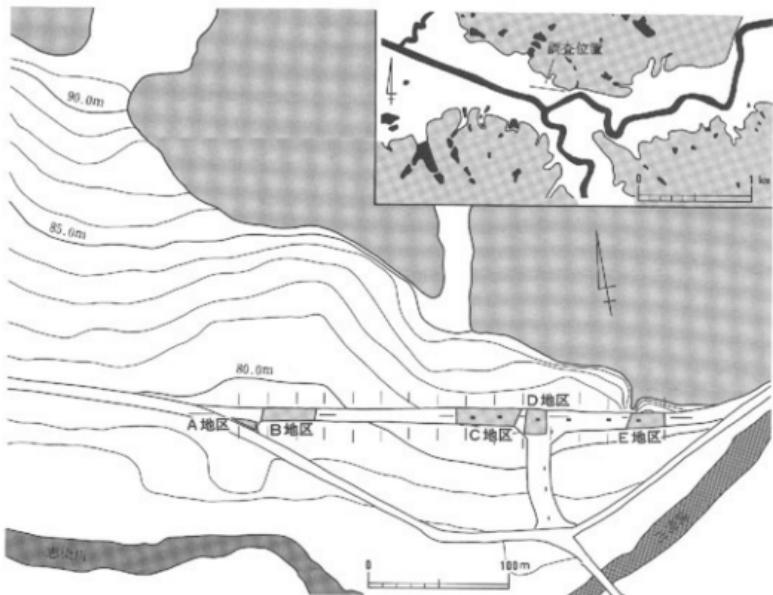
主任技術員 中筋貴美子
企画技術員 片岡喜久子
國化技術員 早川亜紀子・二階堂 康・飯田章子
西原美知子・光澤鈴子・伊藤ミネ子
川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子
和田寿佐子
國化補助技術員 石田裕子・家光和子・小山みゆき
喜多山好子

第2章 位置と環境

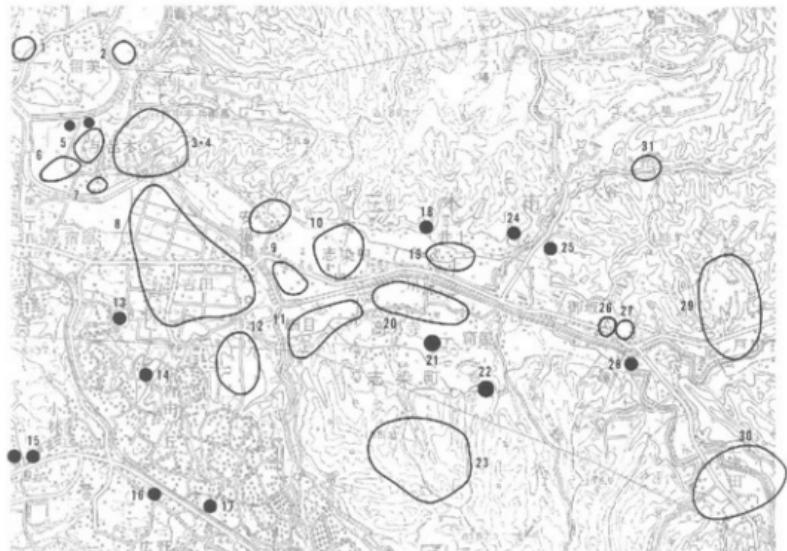
第1節 地理的環境

御坂遺跡は六甲山地の北側に位置し、現在の行政区分では兵庫県三本市志染町御坂に所在する。三本市内は全般になだらかな地形であり、標高200mを超える面積は市内の1.4%に過ぎない。市のはば中央を美嚢川が西流しており、大小の支流は丘陵・台地を浸食し、小河谷を形成する。現在の集落はこの地形を生かした水田適地に立地している。

当遺跡周辺では、加古川の支流である山田川と淡河川が合流し、志染川となってほぼ東から西に流れている。御坂遺跡はその合流点付近の北側、河岸段丘上で、南に向いた緩斜面に立地する。今回調査した地域の北側には大小2筋の谷があり、それに起因する扇状地が発達している。A・B地区は北西側の大きな谷による扇状地の扇端に立地し、C・D地区は小さい谷による扇状地の扇央に立地する。また、E地区は北方からのびる尾根上に立地している。



第1図 調査区周辺地形図



1. 久留美門前遺跡	11. 細目遺跡	22. 窓屋1号墳
2. 平井遺跡	12. 吉田群集墳	23. 高男寺古墳群
3. 与呂木東上野・高越古墳群	13. 宿原5号窯跡	24. 井上1号墳
4. 与呂木古窯跡群	14・15. 古墳	25. 御坂1号墳
5. 古墳	16. 武塚1号墳	26. 御坂遺跡(A, B地点)
6. 与呂木庵ノ元古墳群	17. 広野之池池尻古墳群	27. 御坂遺跡(C, D, E地点)
7. 与呂木東開地古墳群	18. 井上経塚	28. 三津田1号墳
8. 吉田・東吉田遺跡	19. 井上遺跡	29. 戸田遺跡
9. 安福田遺跡	20. イワヤ遺跡	30. 三津田遺跡
10. 中村遺跡	21. 窓屋肩ノ坂古墳	31. 伽耶院

* 5・14・15は、1982年刊の『全国遺跡地図 兵庫県』には名称が表記されていない。

第2図 周辺遺跡分布図

第2節 歴史的環境

御坂遺跡が所在する「志染」(シジミ)という地名はシジミ貝に由来するという地名説話が、古く『播磨國風土記』に載せられており、さらに『古事記』清寧記、『日本書紀』顯宗即位前紀にも「志自牟」として「オケ」(仁賢天皇)「ヲケ」(顯宗天皇)の兄弟の皇子の伝承が伝えられている。また、御坂遺跡に近接する御坂神社は「志染の里の許曾の社」「三坂に坐す神」として『播磨國風土記』に記されており、祭神は芦原志許男命、大物主命、八戸挂須御諸命である。天正年間(1573~92)に秀吉の三木釜山城攻めの際、兵火により社殿を焼失し、慶長13年(1608)に現在の地に移された。

当地域周辺においても、旧石器時代から人間生活の痕跡が認められる。加古川水系周辺の段丘状地形からは遺物が多数採集されており、兵庫県下でも有数の集中地域となっている。三木市域においては現時点では溜池等でナイフ形石器が採集されているのみであり、詳細は不明である。

縄文時代についても詳細は不明であり、調査によって明らかとなった遺跡は知られていない。弥生時代前期では、土器が出土しているものの、遺構の存在は確認されていない。中期でも吉田南遺跡や安福田遺跡、井上遺跡から遺物が出土しているが、分布図が広がるのは弥生時代後期から古墳時代にかけてであり、今回調査された御坂遺跡をはじめ、戸田遺跡とその付近にある小戸田遺跡、細目遺跡、吉田遺跡などで確認されている。戸田遺跡では溝が検出され、庄内式併行と考えられる土器や讃岐系搬入土器の複合口縁壺が出土した。遺構の状況から付近にかなり大規模な集落の存在が想定されている。小戸田遺跡では部分的に全面調査が行われており、弥生時代から古墳時代にかけての方形住居跡5棟と集石遺構2箇所などが検出されている。細目遺跡では弥生時代末から古墳時代にかけてのベッド付の方形住居跡が2棟確認された。吉田遺跡からは壺棺が出土している。

また、美嚢川下流域の正法寺山からは中縦形銅剣の破片が採集されており、さらに、細川町高築からは小銅鐸が出土している。

古墳時代前期から中期になると、加古川流域に比較的大型の前方後円墳が分布するようになる。加古川市の日岡古墳群、聖陵山古墳、行者塚古墳、玉丘古墳がその代表で、三木市周辺では愛宕山古墳(前方後円墳全長95m)がある。

後期では志染の中村遺跡において集落が確認され、カマド付の方形住居跡が6棟、3間×3間の掘立柱建物1棟が検出された。また、久留美の下川原地区では同じく方形住居跡、ピット、溝状遺構などが検出された。平井遺跡からも住居跡が確認されている。これらの集落を構成した人々は丘陵上に多くの墓を残しており、吉田群集墳、与呂木東上野古墳群、与呂木高越古墳群、与呂木庵ノ元古墳群、与呂木東開地古墳群、武塚古墳群、広野野之池池尻古墳群、窟

屋扇ノ坂古墳、窟屋古墳群、高男寺古墳群、井上古墳群、御坂古墳群、三津田古墳群などがある。木棺直葬や箱式石棺を内部主体とする古墳が多いが、窟屋扇ノ坂古墳は調査された横穴式石室の一つである。

その後、歴史時代に入ると加古川流域に古代寺院が築造されるが、三木市内では小和田神社裏遺跡、東紫美カ丘町遺跡において白鳳時代の埴仏が出土している。

奈良時代では、中村遺跡で墨書き器や漆塗土器、曲物、建築部材、溝、杭列などが検出されており、奈良時代末から平安時代前期にかけての寺院あるいは官衙と推定されている。戸田遺跡では奈良時代から平安時代までの掘立柱建物が検出され、綠釉陶器が出土している。

平安時代では奈良時代から続く上記の各遺跡の他に、久留美門前遺跡からは根石・礎石をもつ掘立柱建物が3棟、土坑が13基検出されている。平安時代後期には山岳信仰に伴い密教系の寺院が建立される。伽耶院（天台系單立寺院）、高男寺がその例であり、両寺院とも経塚が造営されている。

平安時代末から鎌倉時代には三木盆地の北側丘陵部及び東南部の丘陵において、跡部古窯跡群、久留美古窯跡群、平井・与呂木古窯跡群、宿原・吉田古窯跡群の各窯跡群が創業されるようになる。播磨国は「延喜式」主計に須恵器調納国として記録されており、重要な生産地帯となっている。ほとんどが瓦陶兼業窯で、平安京内の寺院に供給されていたとの指摘もある。

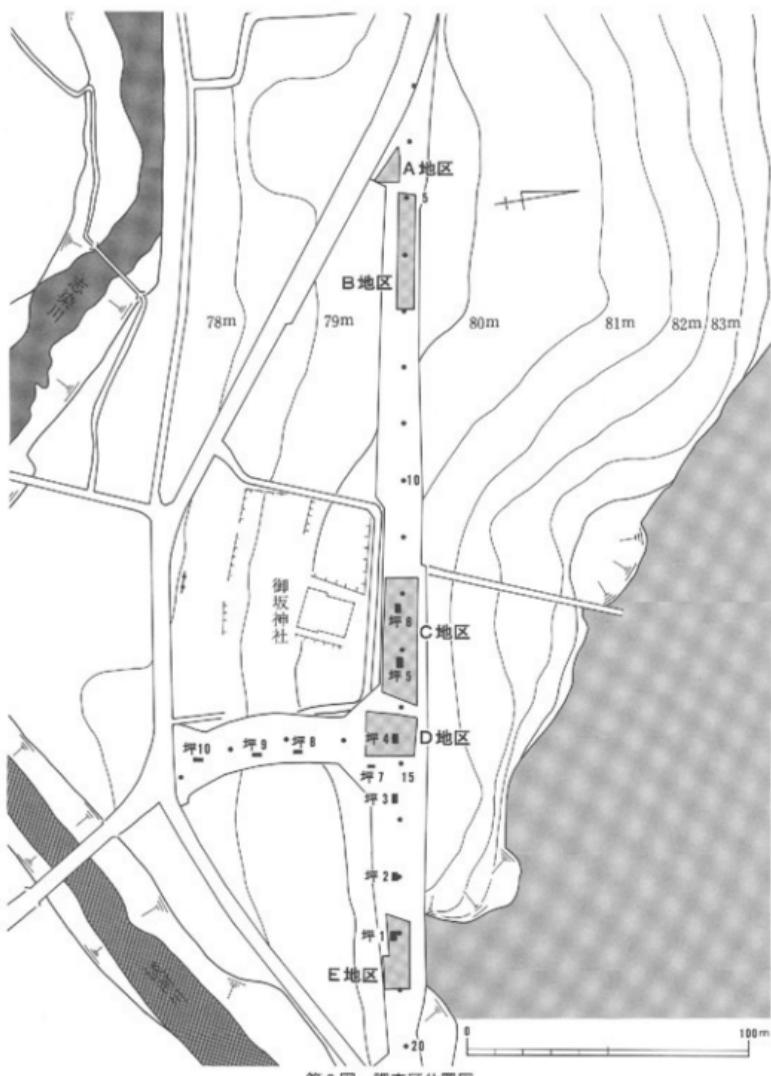
鎌倉時代では、高男寺遺跡において掘立柱建物が2棟、土坑が2基、溝が2本検出され、綠釉陶器、瓦などが出土し、高男寺と関係する可能性も考えられている。東吉田遺跡ではピット、土坑が検出され、戸田遺跡では配石墓が検出されている。

近世に入ると、別所氏により美濃川下流に築かれた三木城（釜山城）が、天正六年（1578）に秀吉により攻められ滅亡する。秀吉は三木に地子免許を与え、それ以降の藩主もそれを認めたため、大工道具を中心とする三木の金物業発展に重要な役割を果たした。

御坂遺跡周辺では窟屋地内において5基の土坑とピットを検出しており、遺構の性格は不明であるものの、土坑埋土から「寛永通宝」が出土している。

参考文献

- 『三木市埋蔵文化財調査概報—昭和50年度～昭和59年度—』三木市教育委員会 1986年
- 『社会教育活動状況報告書』三木市教育委員会 1985年～1991年
- 是川 長ほか『三木市史』三木市 1970年
- 中村 浩・毛利哲夫ほか『久留美毛谷』毛谷古窯跡群埋蔵文化財調査会 1990年
- 『兵庫県大百科事典』神戸新聞出版センター 1983年
- 志賀 剛『式内社の研究 第5巻 山陽道・西海道』雄山閣 1983年
- 『全国遺跡地図 兵庫県』文化庁 1982年



第3図 調査区位置図

第3章 平成2年度の調査

第1節 A地区の調査

1. 調査区の概要

A地区はB地区と共に工事立会によって確認された地区である。立地は、北西側の丘陵にある谷状地形によって形成された扇状地の扇端東端付近に位置する。第3図ではA地区的南側において尾根状に突出する等高線が観察できるが、それはあくまでも微視的な観点であって局部的な地形の改変に伴うものであろう。

調査にあたっては立会時の成果をもとに、遺構面を上層と下層の2面に分けて把握することとした。各面の時期は出土遺物によりそれぞれ鎌倉時代・弥生時代後期に相当する。

また、B地区内からはくさび形石器（第5図）が出土したため、上層・下層の調査が終了した後に断ち割りを行い、さらに下層の状況を把握するように努めた。しかし、当該期の包含層・遺構面は確認できず、遺物も出土しなかった。調査面積は約85m²である。

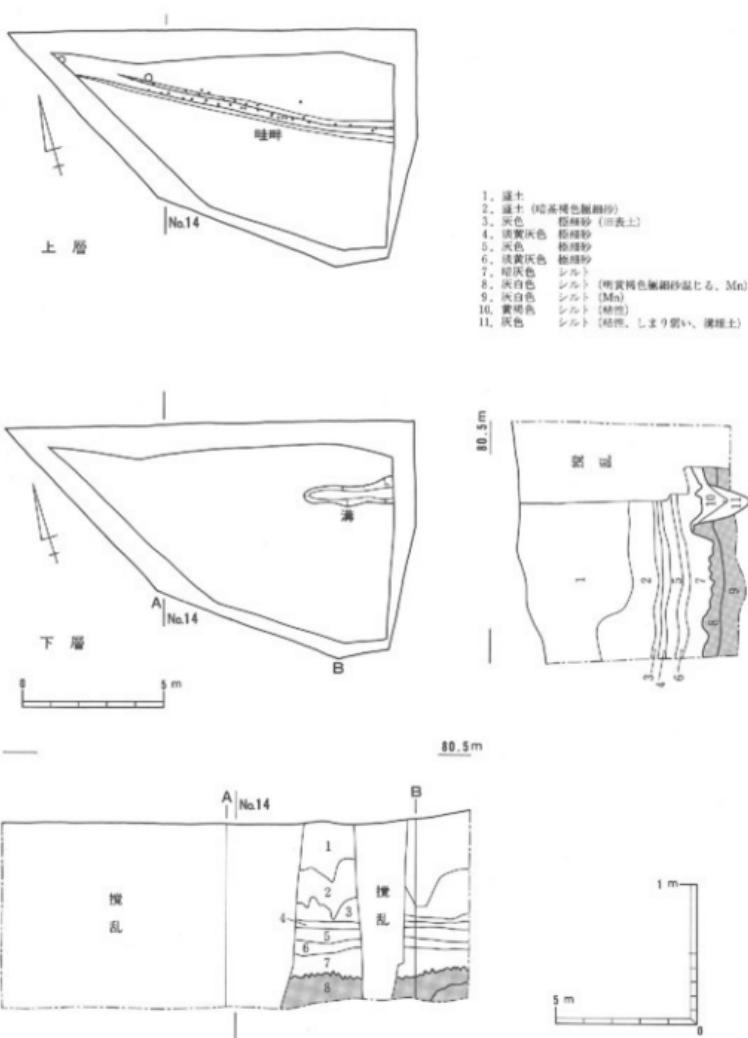
2. 層序

調査区内は削平され、また周辺は現道、道路標識などにより大きく搅乱されていた。そのため、調査区周壁において土層堆積状況が確認できなかった箇所も存在する。上層の遺構面は8・10層の水田土壤で、直上の7層には鎌倉時代の土器が含まれていた。下層の遺構面は、削平のため上層の遺構面と同じであるが、上層からの土壤化のため、検出が困難であり、よって検出は9層直上で行った。弥生土器は8層から出土しているが、上層の7層からも出土している。

3. 遺構

上層は鎌倉時代の水田である。畦畔が1本検出されたが、その方向は北から約60°西へ振っている。畦畔には直径10cm程度の杭が不規則に打ち込まれており、中には杭が遺存するものもある。深さは20cm程度で、さらに上層から打ち込まれた可能性もあるが、ほぼ畦畔に沿っていることから本遺構面に対応するものと考えた。水田土壤は灰白色のシルト層で、厚さは平均約10cmである。上層と接する面は凹凸が多いが、平面形が足跡状になるものはなく、また規則的に並ばなかった。標高は北側が79.57m、南側が79.48mで、北側が周辺の地形と同様に高く、その差は約10cmである。

下層では弥生時代後期の溝が1本のみ検出された。ほぼ東西方向で、長さ約3mのみ検出できたが、削平のためか途中で途切れている。溝の埋土は灰色シルト層であった。検出面で幅1m、深さ12.5cmを測る。底の標高は東側が78.67m、西側が78.70mで、若干であるが西側が高いことが判る。



第4図 A地区 平面図・土層断面図

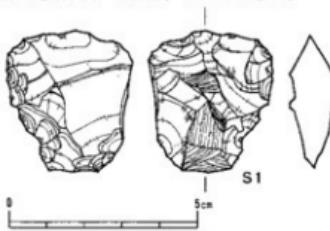
第2節 B地区の調査

1. 調査区の概要

B地区はA地区と共に立会いによって確認された地区で、東西36.2m、南北5m、面積181m²である。A地区的東側に隣接し、立地はA地区と同じ扇状地の東端から谷部に位置する。また、A地区同様に現道、道路標識などにより自然堆積層が大きく搅乱されていた。

調査方法は、A地区的上層において検出された水田が、B地区においては削平のため層的に良好に残存していないかったため、下層の弥生時代後期の遺構面まで掘削することとした。

また、A地区からチャート製のくさび形石器が出土した（第5図）。片側の側縁は欠損しているが、周囲に調整が施されている。この石器が出土したため、上・下層の調査終了後、さらに下層の状況を確認すべく断ち割りを行ったが、当該期の包含層・遺構面は確認できず、遺物についても他には出土しなかった。



第5図 石器実測図

2. 層序

B地区はA地区と同様に搅乱、削平のため、調査区周壁では土層の堆積状況が不明である箇所も存在する。

A地区に認められた上層の水田遺構は、B地区では土層断面でのみ確認できた。8'層がその痕跡である。A地区から続く弥生時代の遺構面は標高79.1m前後の8'層・8層および9層の上面である。B地区でもこの遺構面に対応する土壤層が確認できず、削平されたものと考えられる。なお、溝3の切り込まれた遺構面は上層からの土壤化のため不明瞭であった。

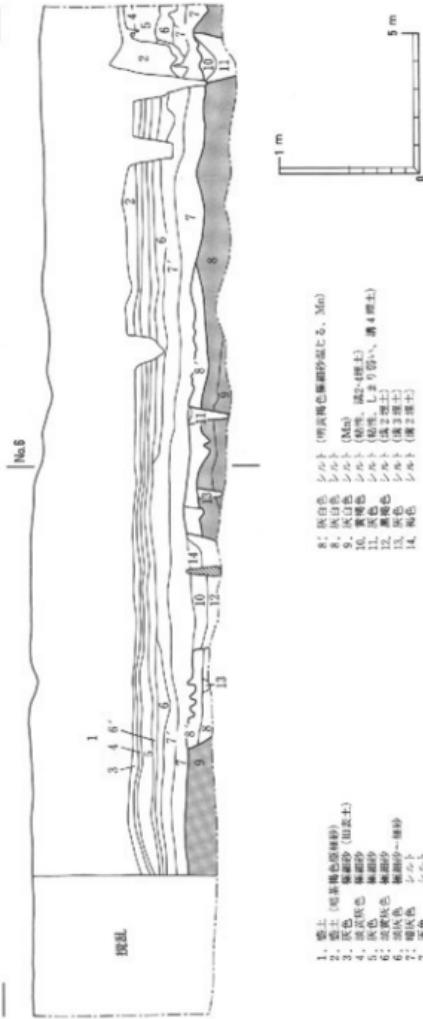
3. 遺構

鎌倉時代の柱穴が3、溝状遺構が1、弥生時代後期の溝が4本検出された。

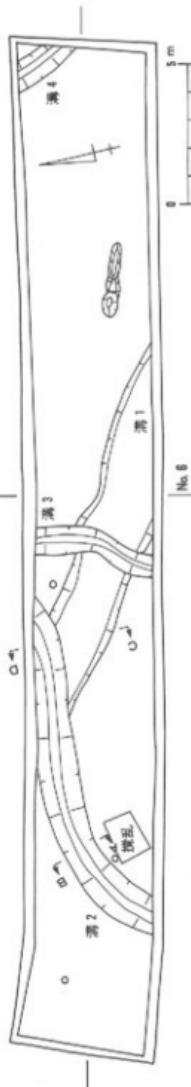
鎌倉時代の遺構は削平されているため、弥生時代の遺構面まで到達していたもののみ検出できた。柱穴は3箇所検出され、直径20~30cm程度、深さ10cm程度である。いずれも調査区の西側半分において検出されたが、互いに規則性はなく、もっとも至近距離にある柱穴間でも4.7m離れている。溝状遺構は調査区のやや東側からほぼ東西に認められた。幅30~40cm、長さ2m、深さ20cmを測る。西側半分ではさらに10cm程下がる円形の窪みがあった。

弥生時代後期の遺構としては溝が4本検出された。いずれの溝からも弥生時代後期の遺物のみが出土しているが、各溝には若干の時期差があり、切り合い関係により完全に埋没した溝1は溝2・溝3に先行することがわかる。一方、切り合いのない溝4及び溝2・溝3については

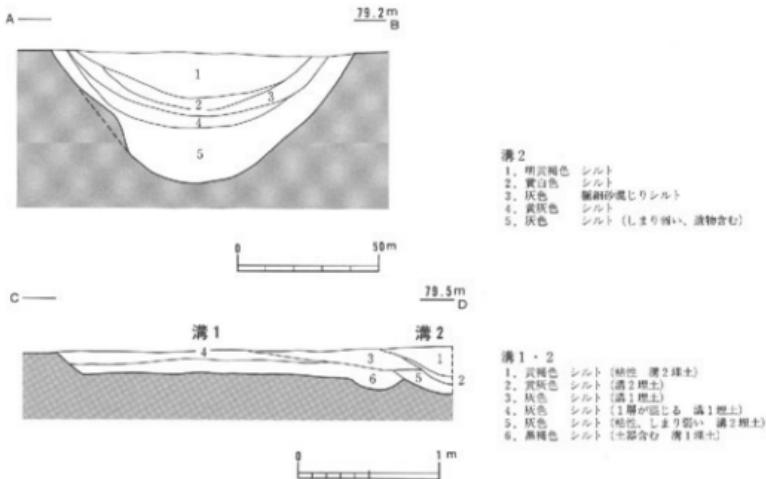
80.5m



— 11 —



第6図 B地区平面図・土層断面図



第7図 B地区 溝1・2土層断面図

前後関係を明確にできないが、溝1と溝4、溝2と溝3の埋土が比較的類似していることから、溝1・溝4が近い時期に掘削され、それらが埋没した後に溝3が掘削されたと考えられる。溝2・溝3の前後関係については切り合いかは不明であるが、溝1と溝2が互いに再掘削しながら埋没している（第7図）のに対し、溝1と溝3についてはそのような関係が認められないことから、溝2は溝3に先行するものと考えられる。

早い段階で掘削された溝1は幅約1.60m、深さ約20cmで、他の溝と比較して幅が広いが浅く、断面は皿状である。方向は北西から南東に向いている。溝底のレベルは東側の方が約5cm高い。溝埋土の最下層からは土器が比較的多く出土した。

溝2は幅約1m、深さ約1mで、蛇行しながらほぼ東西方向に延びている。溝底のレベルは東側のはうが約10cm高い。溝1とは互いに掘削を繰り返していたことが土層断面（第7図）より判断できる。

溝2と同様に溝1の埋没後に掘削された溝3は幅約0.8m、深さ約40cmを測り、ほぼ北から南へ向いている。溝底のレベルは南北ともほぼ同じである。

溝4は調査区北東隅で検出された。幅約0.8m、深さ約40cmを測り、北西から南東方向を向いている。溝底のレベルは北西側が約5cmほど高いが、検出できた範囲が限られているため、流れの方向については明らかにすることはできない。

第3節 遺物

A・B地区から出土した遺物は、前述の石器以外は土器のみで、出土総数はセキスイコンテナTS28に4箱である。ほとんどが弥生時代後期の遺物で、溝からの出土であるが、A地区では水田の上層より、またB地区では包含層より平安時代後半から鎌倉時代に属する遺物が若干出土している。いずれの遺物も残存状況は悪く、調整等が観察できないものがほとんどである。

出土遺物の器種をまとめると、弥生時代後期の遺物としては甕・壺・高环・鉢、平安時代後半から鎌倉時代を中心とする遺物としては土師質の羽釜・小皿・須恵質の皿・塊・捏鉢・白磁の碗・青磁の碗、天目茶碗などがある。そのうち図化し得なかった個体(66~70)もある。

以下、出土遺物について弥生時代、平安時代～鎌倉時代の順に記すが、遺構からの一括性を重視するため、出土位置により分けて記述する。

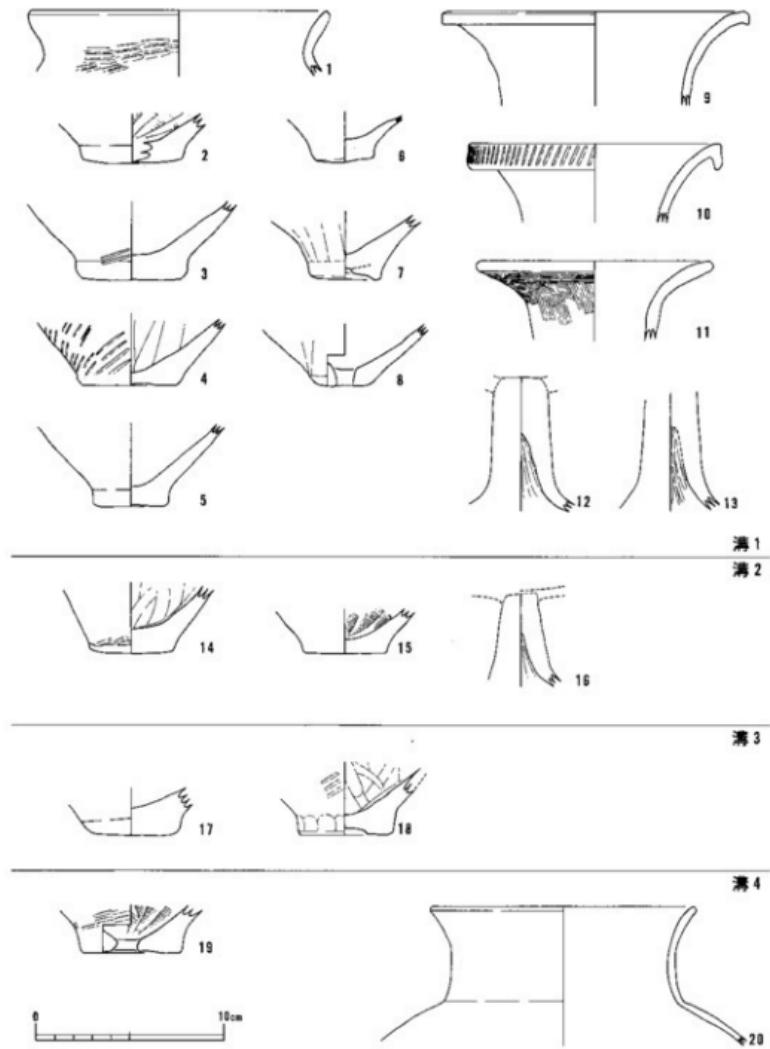
1. B地区 溝1出土遺物（第8図1～13）

1は甕の口縁部片である。明瞭な屈曲点を残さず、緩やかに外反し、端部は丸い。外面には、ほぼ水平の平行タタキが頸部の若干上方から体部にかけて認められる。内面の調整は剥離のため不明である。

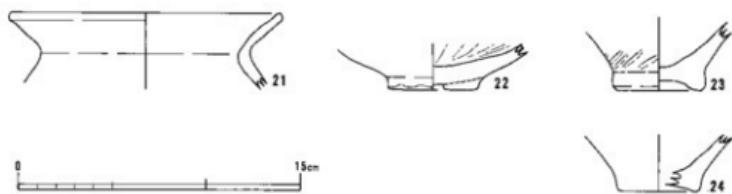
2～8は底部片である。2はやや突出した比較的大きい底部である。外面は調整不明であるが、内面には左回りのハケメが観察できる。3はやや突出した比較的大きい底部である。外面の底部付近にはやや右上がりのタタキが若干観察できる。4は突出しない底部で底径は比較的大きい。外面には底部下端を除いた全面に右上がりのタタキが観察できる。内面にはハケ調整と思われる痕跡が確認できる。5は小さく突出した底部片である。6はゆるやかに小さく突出した底部片である。内外面ともに調整は確認できない。7はいわゆるドーナツ底の底部片で、中心部は上げ底になっている。外面には縦方向の稜線が認められるが、調整は内面と同様に不明瞭である。8は焼成前の穿孔が認められる底部片で、ほとんど突出せず、底径は比較的小さい。

9～11は壺の口縁部片である。9は頸部から口縁部に向かって緩やかに外反し、端部は平たく、面を外側に向いている。10は頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反するが、比較的直線的に延びる。口縁部は下方へ屈曲させ、外面には刻目の文様を施す。11は頸部から口縁部にかけてラッパ状に外反し、端部は丸い。調整は外面のハケメのみ認められ、口縁部付近は横方向、頸部にかけては縦方向に観察できる。

12～13は高环脚部の破片である。12は接合手法による高环の柱状部で、内面には絞りの痕跡が認められる。円柱状の柱状部から大きく外反する脚部をもつ。13についても同様であるが、12と比較すると脚の開く度合いが比較的のだらかである。



第8図 A・B地区 出土遺物(1)



第9図 A・B地区 出土遺物(2)

2. B地区 溝2出土遺物(第8図-14~16)

14・15は底部片である。14はほとんど突出しない底部で、上外方に直線的に開く体部をもつ。調整は外面底部付近にはタタキの痕跡が確認されるが、内面には板状工具によるナデと思われる調整が認められる。15は若干突出する底部である。外面には調整を確認することはできないが、内面には左回りのハケメが確認できる。

16は高環脚部の破片である。内面には絞りの痕跡が認められる。柱状部から下方へと序々に開き、緩やかに外反する。

3. B地区 溝3出土遺物(第8図-17・18)

17は若干突出する底部で、歪みのため部分によりその突出度が異なる。18は突出したドーナツ底で、上げ底になっている。外面には右上がりのタタキと思われる痕跡が確認でき、突出部外面には指頭圧痕が観察される。内面には板状工具による不定方向のナデが観察される。

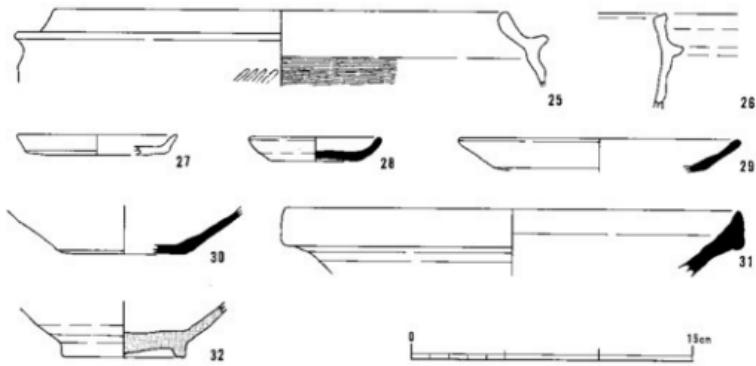
4. B地区 溝4出土遺物(第8図-19・20)

19は若干突出する底部片で、底には焼成後の穿孔が認められる。突出した底部の外面にはナデが認められ、それより上方には水平かやや右上がりのタタキが観察できる。内面には右回りのハケメが観察できる。

20は壺の口縁部から体部にかけての破片である。ほぼ直立する頸部から口縁部へと緩やかに外反し、上外方に開く。口縁端部は丸い。体部は肩が張ることなく、なだらかに弯曲する。調整は剥落のため不明である。

5. A地区 溝出土遺物(第9図-21・22)

21は壺の口縁部である。「く」字形に屈曲するが、内面には屈曲による稜はない。口縁端部は丸い。内外面とも調整は不明である。22は壺、あるいは鉢と思われるドーナツ底の底部片である。底径は大きいが突出した底部の高さは低い。底部から体部にかけては大きく広がっている。調整は内面が剥落のため不明であるが、内面にはハケメが観察される。



第10図 A・B地区 出土遺物（3）

6. A地区 包含層出土遺物（第9図23・24）

23はやや突出した底部片である。突出部より上方においては右上がりのタタキが認められるが、内面の調整は不明である。24の調整は内外面とも不明である。

7. A地区 上層出土遺物（第10図25～28、カラー図版一67）

鎌倉時代を中心とする遺物が出土した。25・26は土師器羽釜である。内傾し肥厚する口縁部と、低い甥をもつ。内面は横方向のハケ仕上げで、体部外面には右上がりのタタキが認められる。26は破片であるため、口径・傾きなど不明である。口縁端部に平坦面をもち、体部には低い甥が巡る。調整はヨコナデのみ確認できる。27は土師器小皿である。底部はほぼ平らで、屈曲して短く外傾する口縁部をもつ。口縁部がナデ調整で、底部に指頭圧痕が認められる。

28は須恵器小皿である。底部から口縁部へと緩やかに彎曲し、上外方へのびる。調整は回転ナデで、底部にはヘラ切りの痕跡が認められる。カラー図版一の67は白磁碗である。

8. B地区 包含層出土遺物（第10図29～32、カラー図版一66・68～70）

A地区上層に対応する鎌倉時代を中心とする遺物がある。29は体部下半にヘラ削りの痕跡が認められる。口縁端部は丸く肥厚し、体部は大きく上外方へ開く。30は須恵器塊底部の破片で、底には回転糸切りの痕跡が認められる。31は須恵器捏鉢で、端部は上方につまみ上げ、厚い。32は高台を有する白磁碗の底部片である。緑灰色の釉がかかるが、高台付近から下は認められず、見込みの釉は輪状に削りとされている。カラー図版一の66は蓮弁文の青磁碗、同68は端反り口縁の白磁碗、同69は白磁、同70は天目茶碗である。

第4章 平成3年度の調査

第1節 確認調査

当初、工事対象範囲では平成2年度に全面調査を実施した区間（A・B地区）以外に、遺跡の分布は明らかではなかった。しかし、A・B地区と同様の地形が東側に続いていることに加え、中世を中心とする多量の土器が表面採取された。これは、工事に先立ち現耕土の鋤き取り・水路の付け替え作業が実施され耕土下の土が動かされたためである。これによって、遺跡の存在が推測され、確認調査を実施した。

確認調査は試掘坑（坪）を10箇所に設定し、断面精査を中心に実施した。試掘坑の規模は本線部分に設定した坪1～6が2m×3m、現県道からの進入路に当たる部分に設定した坪7～10が1m×3mである。いずれも無遺物層もしくは基盤層（礫層）に届く約1mの深さまでを調査対象とし、調査の必要に応じて掘削深度を変更した。坪1～7は4月11日に、坪8～10は5月8日に調査を実施した。

結果、10箇所の試掘坑の内、坪1・4・5・6において遺構・遺物包含層を検出した。

各試掘坑の土層堆積は基本的には以下の6層に集約できる。I層—盛土・耕土、II層—灰色極細砂（須恵器包含層）、III層—褐灰色シルト、IV層—灰褐もしくは淡茶灰色シルト（弥生土器包含層）、V層—黄灰色シルト、VI層—基盤層（砂礫）である。この層序は前年の全面調査区（A・B地区）ともほぼ同じである。

以下、基本層序によって各試掘坑の状況の概略を述べておく。

坪1では盛土直下のII層上面より埋土に土師器片を含む柱穴を検出した。

坪2・3では谷部の堆積が出現し、遺構・遺物包含層は検出されなかった。

坪4では弥生時代後期の遺物包含層（IV層）を検出し、直下より溝状遺構を検出した。

坪5では溝状遺構・土壤・ビットを検出した。溝状遺構はIII層上面より、土壤・ビットはIV層上面より検出した。

坪6ではビットをIV層上面で検出し、またIV層において、弥生土器の包含を確認した。

坪7～10では、遺構・遺物包含層は検出されなかった。

これらの確認調査結果から坪4・5・6のIII層直下より検出される遺構は中世—鎌倉時代の可能性が高く、その下層に弥生時代後期の包含層と遺構面が存在するものと考えられた。また、坪2・3及び7～10周辺は旧地形の谷部に当たり、遺構・包含層は存在しないものと考えられた。また、坪1については鎌倉時代以降の遺構の存在が考えられた。

以上の調査結果をもって、全面調査範囲を確定し、C～E地区の調査へと移行した。

第2節 C地区の調査

1. 調査区の概要

C地区は、道路センターNo12~14杭付近に設定した調査区で、調査面積は565m²を測る。

調査にあたっては、調査区を縦断して南北方向にのびる道路および排水路を確保する必要があったため、ここで調査区を二分割し、これより西をC地区、東をD地区とよぶこととした。

また、C・D両地区内には調査区と並行する水道管が既に地下に埋設されていたため、この部分の調査を除外することになった。

調査前に、当地区的圃場整備前の1/1,000地形図をもとに、現況地形の1m間隔の等高線図を作成した（第1図）。この微地形復元図によれば、C地区は小規模な扇状地の中央付近に位置することが分かり、遺跡が立地するにはさほど良い条件ではないと考えられた。

確認調査の結果想定されたとおり、全城にわたって二面の遺構面が認められた。

上層遺構面においては、中世の土壙、溝、柱穴などの遺構が、下層遺構面においては、弥生時代後期の土壙、柱穴数基が確認された。しかしながら、遺構の密度はきわめて希薄であり、また出土した遺物の量も少なく、遺跡の中心部分からははずれていっていることが想定される。

2. 層序

遺構面は標高80.6m前後の17・21・40層上面および、標高80.2m前後の22・46層上面である。両遺構面とも土壤化しておらず、特に上層遺構面は、旧床土層に切られているため、後世の水田造成によって削平を受けていることが分かる。その後は調査前まで水田として利用されていた。

47層直下には、角礫を多く含み、よく締まった土層の堆積が認められる。46・47層からの遺物の出土がなかったことを考え合わせ、これ以下を無遺物層と判断した。

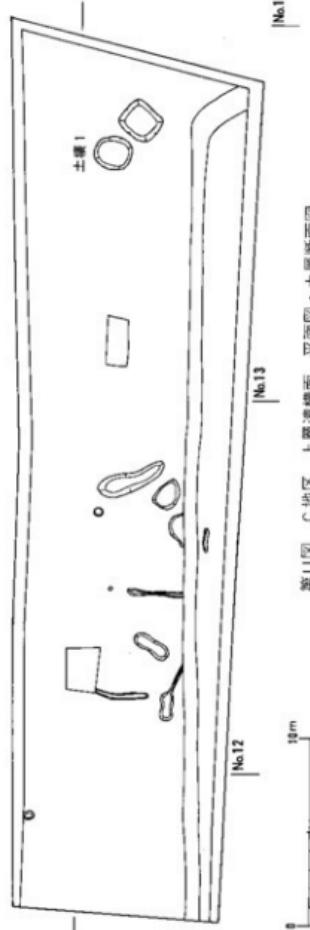
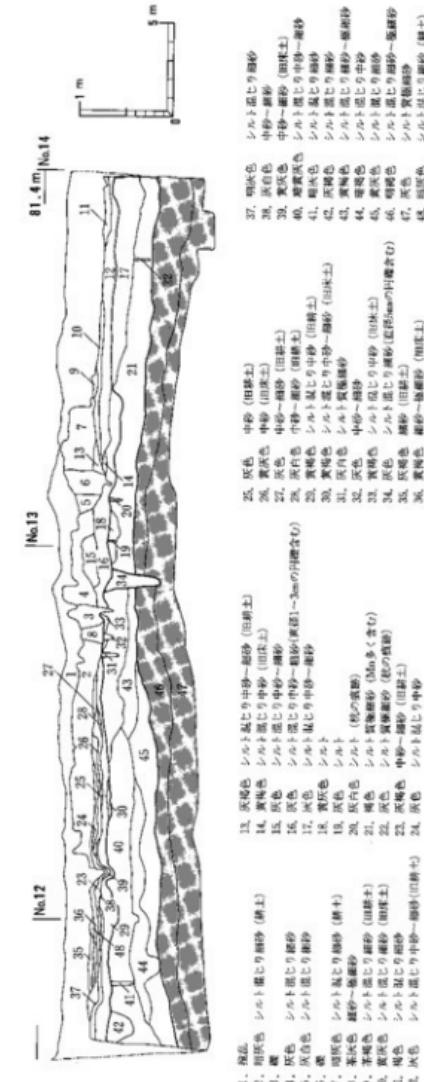
3. 遺構

上層遺構面において、土壙9基、溝3本が検出された。これらは居住に関する遺構と考えられ、C地区が居住域の一部に相当していることが分かるが、建物等の存在を示す柱穴などは確認されなかった。

包含層および遺構埋土からは時期を決定する良好な資料が得られなかったが、12~13世紀代にかけて利用された遺構面と考えられる。

下層遺構面では、土壙2基、柱穴14個など、居住域であることを示す遺構が若干確認された。柱穴のなかには、孤立柱建物や棚を構成するものは含まれない。

下層遺構面は、D地区の遺構面から連続すると考えられることから、弥生時代後期を中心とする時期に當まれた遺構面であることが分かる。



2

土壤1 上層遺構面の調査区東端部で検出された性格不明の土壤である。

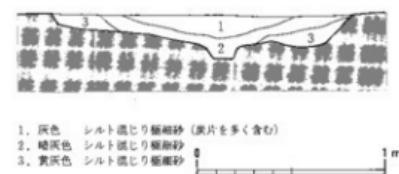
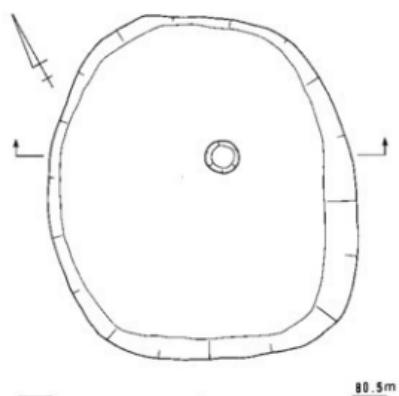
平面は橢円形を呈し、断面は皿状である。

規模は、長軸の長さ183cm、短軸の長さ165cmで、深さは15cm程度である。

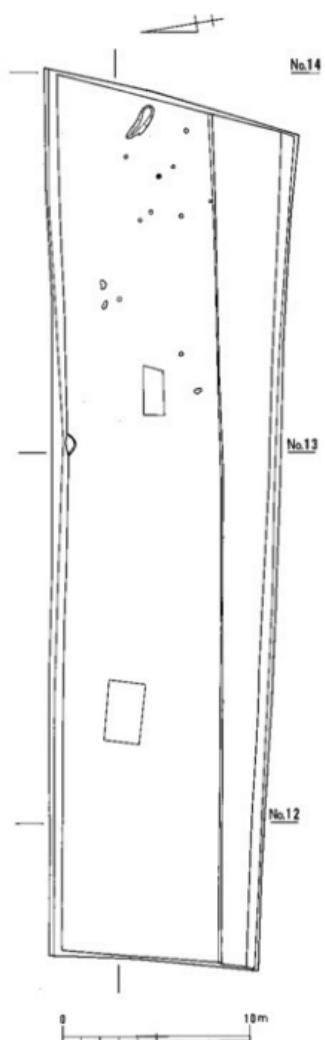
埋土は3層に分かれ、最上層には炭片が多く含まれていた。

壇底に柱穴状の窪みが認められたが、埋土は土壤のそれと区別できなかったため、同一の遺構と考えることとする。

遺物は出土していないが、上層遺構面で検出されたことから、12~13世紀頃の所産と考えられる。



第12図 C地区 土壤1



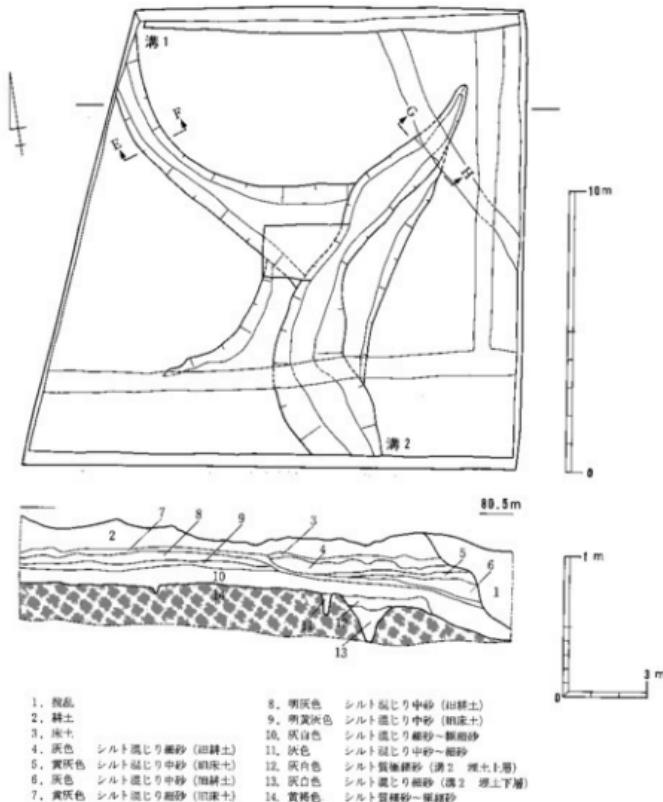
第13図 C地区 下層遺構面平面図

第3節 D地区の調査

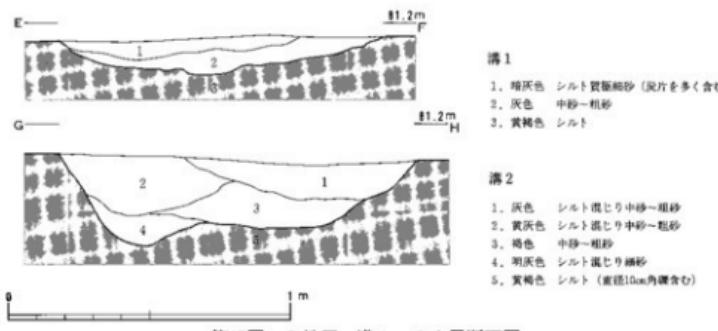
1. 調査区の概要

D地区は、道路センターNo.14～15杭間に設定した調査区で、道路および水路を挟んでC地区に東接する。調査面積は260m²を測る。

現在、C・D両地区の地表面には約80cmの比高差が認められる。また、確認調査によって、



第14図 D地区 平面図・土層断面図



第15図 D地区 溝1・2土層断面図

C地区には遺構面が2面あるのに対し、D地区には1面しか存在しないことが確かめられており、D地区においては、上層の遺構面がすでに削平されていることが想定された。

調査の結果、遺構面は1面であり、平面で弥生時代後期の溝2本、南壁断面で柱穴1個が検出されている。

2. 層序

当地区における遺構面は、標高約80.0mの黄褐色シルト（14層）上面である。この遺構面には顕著な土壤化が認められず、長期にわたって利用されていた面とはいいがたい状況にある。遺構面は、南北方向への傾斜はさほど大きくなないが、東方に低くなる傾斜をもち、西方のC地区における下層遺構面から連続している。

その後、若干の土砂（10層）の供給があったのち、当地は水田として調査前まで利用されていた。

3. 遺構

調査区中央付近で切り合う2本の溝を検出した。両溝は緩い弧状を呈し、北から南へ深くなっている。

溝1 北西隅から南東方向にのびる溝である。幅は北西隅で1.05m、溝2に切られる南東隅では4.10mとしだいに幅が広くなっている。深さは北西隅で13cm、南東隅で10cmを測り、溝底の比高差は約10cmである。断面は皿状を呈する。埋土は上下2層に分かれ、炭片を多く含む最上層から弥生時代後期の土器が出土した。

溝2 北東端はしだいに浅くなり、調査区内で消滅している。幅は最も広い箇所で3.10mである。深さは、北東端で14cm、南西端で32cmを測り、溝底の比高差は約18cmである。断面は台形であり、最下層を除く各層から弥生時代後期を中心とした土器片が多く出土しており、弥生時代中期の壺（39）、奈良時代の須恵器壺の小片も出土している。

第4節 E地区の調査

1. 調査区の概要

E地区は、道路センターNo18~19杭付近に設定した調査区で、調査面積は327m²である。

地元では当地区付近を「古屋敷」とよぶため、さほど古くない屋敷跡の存在が想定された。

調査の結果、調査前の平坦な地形は宅地造成などの近世以降の盛土によるものだということが判明し、それ以前には南東方向にしだいに低くなる地形であったことが分かった。

調査においては、地山と考えられる黄褐色シルト（36層）上面まで掘り下げ、中世頃の土壤（土壤1）、柱穴等を検出した。しかし、後述するように、土層断面の観察などによれば、近世頃にも当地が利用されていたことが分かった。具体的には、調査区の北東隅に屋敷地を確保するため、傾斜地に手を加えて平坦面を造り出したり、また、埋没しつつある調査区南半を水田として利用したということである。

2. 層序

このように遺構面は二面確認され、下層遺構面は北側で標高80.9m、南側で79.6mと傾斜をもつ黄褐色シルト（36層）上面である。その後、調査区南半部の低地に土砂（14~21層・24~35層など）の堆積が進み、水田などに利用された上層遺構面となる。北半部には土砂が供給されず、この部分での上層遺構面は下層遺構面と同じく36層上面である。

3. 遺構

下層遺構面で検出された遺構には、土壤状の落ちこみ1基および柱穴15個があげられる。

土壤1 調査区西端から調査区外へのびる形で検出された不整形の土壤である。溝状を呈する東端部からしだいに幅が広くなって南西方向にのびるようである。深さは東端部で11cm、南西部で25cmを測る。

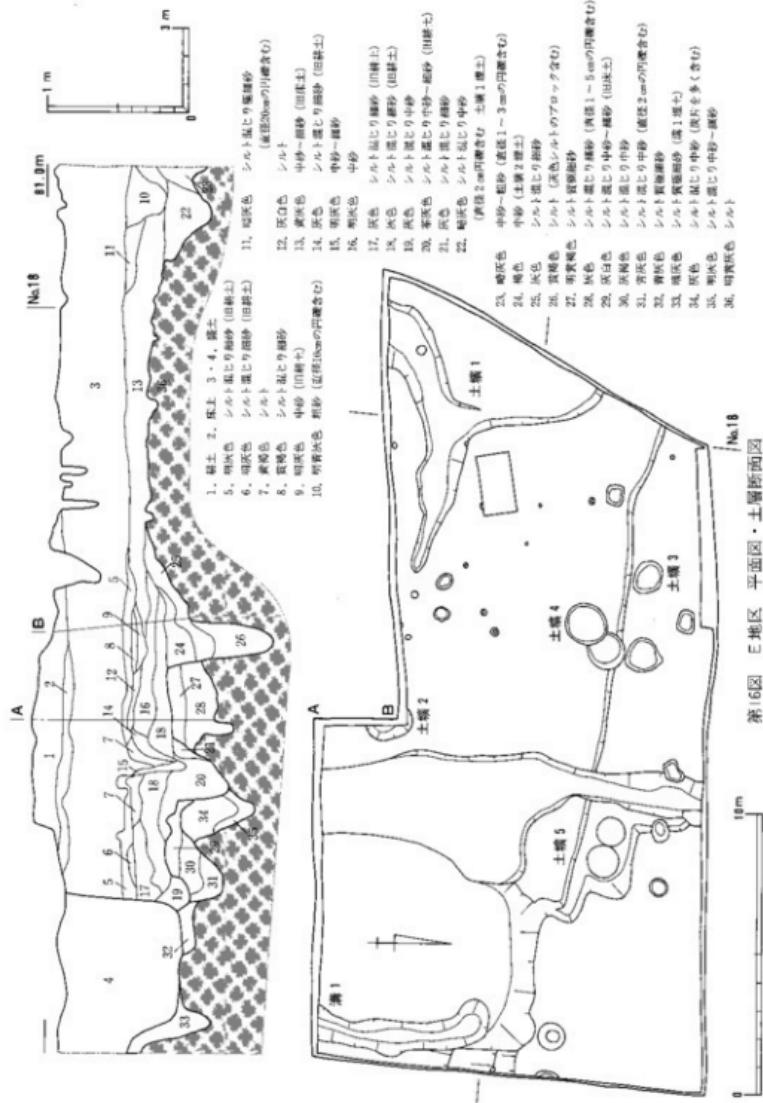
埋土は22~23層で、円礫を多く含んでいる。調査区南壁での土層の検討によれば、東半部での溝状遺構はこの土壤と別個の遺構の可能性がある。遺物の出土状況の上からは、溝状の部分と浅い落ち込み部分とを明確に区別できず、散漫な出土状況を示していた。

柱穴 15個の柱穴が調査区南西部を中心に検出された。掘立柱建物あるいは櫛状の施設があった可能性は高いが、建物等の復元是不可能であった。固化できなかったが、埋土からは中世の須恵器小皿の鱗片などが出土している。

上層遺構面では、平面円形の土壤16基と溝2本があげられる。

土壤の多くはいわゆる結桶とよばれる木製の桶を設置するものであり、屋敷地と思われる調査区北半の平坦面の縁辺部に集中して位置することから、台所の水溜めないしは廻として利用されたものと考えられる。

第16図 E地区 平面図・土層断面図



第5節 遺物

C～E地区で出土した遺物は、5点の鉄器を除けば土器のみであり、出土総数はセキスイコンテナTS28に4箱程度である。

1. C地区 上層遺構面直上の出土遺物

33は土師器釜で、鉗は積み上げによって作り出している。鉗端部は三角形に尖るもの、突出度は低く、段に近い形態を示す。全体に磨滅が激しく、調整手法等の詳細は観察不可能である。16世紀後半のものと考えられる。

34～36はいわゆる東播系須恵器の片口鉢である。34は口縁部外縁が三角形に突出した形態を示す。12世紀初頭の所産か。35は直角に切られるような口縁部をやや肥厚させており、12世紀前半の所産と思われる。36は口縁部を上下に拡張しており、13世紀初頭のものと考えてよい。

37は須恵器壺の口縁部の破片である。丸くおさめた口縁部はやや肥厚する。12世紀頃の所産か。

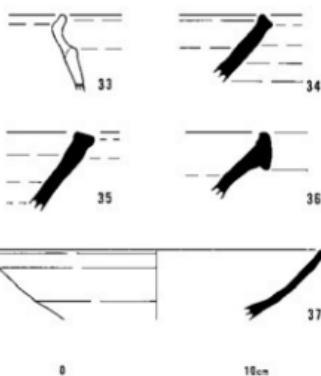
2. D地区 溝1出土遺物

弥生時代後期の土器の細片が出土している。図化したのは甕の底部片1点(38)である。磨滅が激しいが、底部外面に木の葉の圧痕が観察できる。生駒西麓産の土器細片も1点確認している。

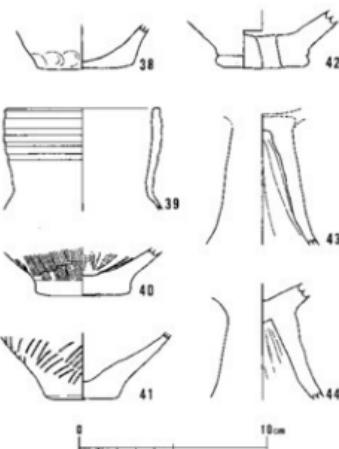
3. D地区 溝2出土遺物

39は弥生時代中期(畿内第IV様式併行)の壺の肩部以上の破片である。口頸部には3条の凹線を巡らしている。磨滅が激しいため、調整手法等の詳細は観察不可能である。

40～44は弥生時代後期の土器である。40は壺の底部片である。内面にはクモの巣状のハケメを施している。41・42は甕の底部片である。41の底部には木の葉の圧痕が認められ、体部下半に右上がりのタタキ整形を行う。42の底部には、中央よりややずれた場所に焼成前の穿孔が1個認められる。底部内面はナデ仕上げである。43・44は高環の柱状部の破片である。



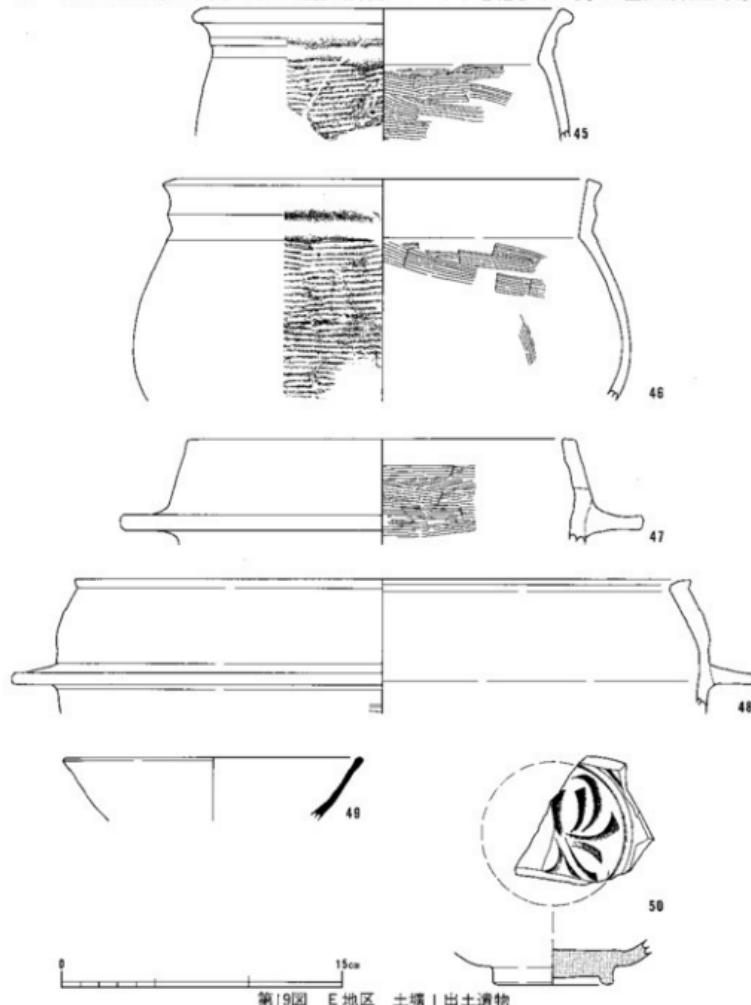
第17図 C地区 上層遺構面出土遺物



第18図 D地区 溝1・2出土遺物

4. E地区 土壌I出土遺物

45・46は土師器場である。45は口縁部内外面にヨコナデを施している。口径は19.1cmである。



第19図 E地区 土壌I出土遺物

46は体部内面に横方向のハケ調整を施し、口縁部の内外面はヨコナデで仕上げている。両者とも外面には口縁部まで煤が付着している。ともに12世紀後半頃の所産と思われる。

47・48は土師器羽釜である。47は直立する口縁部と、強く突出する鉢をもつ。内面はハケ仕上げである。48は内弯する口縁部と、強く突出する鉢をもつ。内面はヨコナデで仕上げ、体部外面には横方向のタタキが認められる。いずれも12世紀代におさまる時期の所産であろう。

49は須恵器塊の口縁部の小片である。12世紀頃のものとみてよい。

50は青磁碗の底部の破片である。いわゆる龍泉窯系の青磁碗で、高台置付およびその内面は露胎である。底部の器内は厚く、内面には草花文が施される。12世紀中葉～13世紀初頭に出土例の多い資料である。

このほか図化しなかったが、須恵器小皿・甕などの小片が出土している。

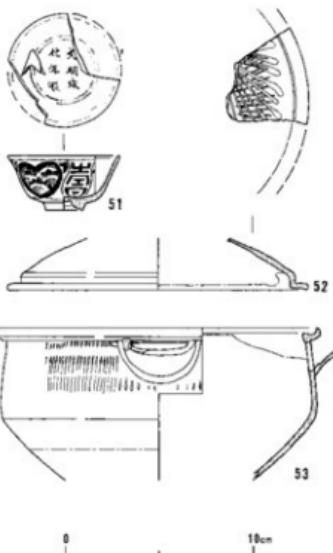
5. E地区 土壌3出土遺物

51は染付の小盃である。蛇ノ目高台で脛付は露胎、高台裏に施釉している。外面には窓内花と字文のセットを三方向に配する。見込みに「大明成化年製」を記している。产地は不明。

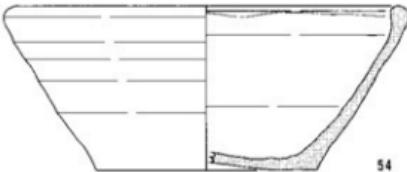
52・53は施釉陶器である。52は行平鍋の蓋であるが、53とセットになる可能性もある。体部に鐵泥漿を塗布したあと、トピガンナを施し、白泥漿による「イッチン」技法を用いる。内面に透明釉がみられる。19世紀代のもので、产地は不明。53は行平鍋である。体部には鐵泥漿を刷毛塗りしたあと、下半に回転ヘラケズリを加える。体部上半にはトピガンナによる施文がみられる。19世紀代の所産と思われる。产地は不明。

6. E地区 土壌4出土遺物

54は丹波焼の鉢である。内面には白色を呈する透明度の低い釉がみられる。焼



第20図 E地区 土壌3出土遺物



第21図 E地区 土壌4出土遺物

成は須恵質である。回転ナデによって仕上げられている。口径は20.4cm、器高は8.7cmを測る。時期は不明。

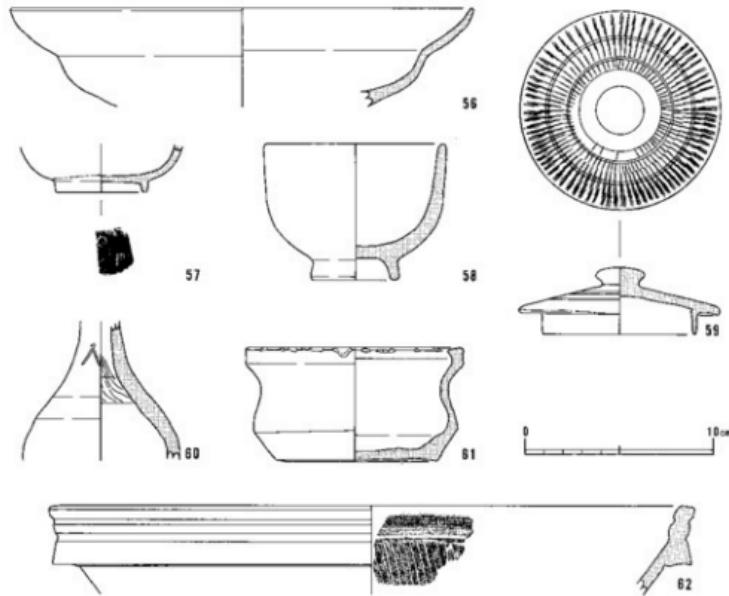
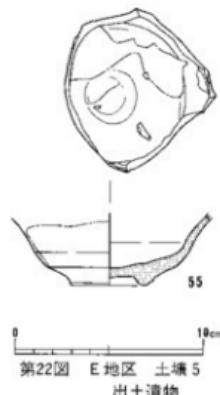
7. E地区 土壌5出土遺物

55は肥前系の施釉陶器で器種は皿である。見込みに胎土目がみられる。外面には白色の釉がみられ、体部下半が露胎である。17世紀初頭に位置づけられる資料である。

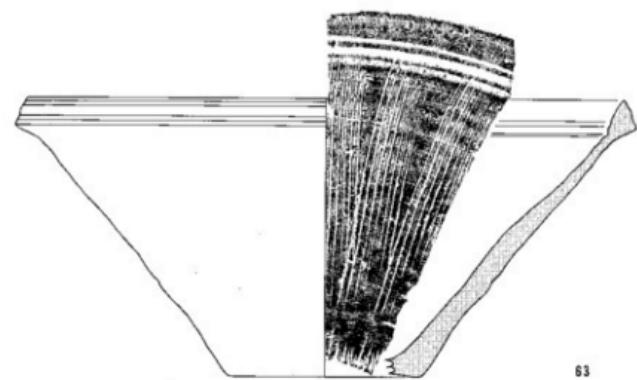
8. E地区 近世堆積層出土遺物

施釉陶器（肥前系・京焼系・在地産）、無釉陶器（備前焼・丹波焼・産地不明のもの）、磁器（青磁・肥前系や在地産の染付け）のほか、平瓦などが出土している。図化しえなかった個体が多いが、これらはすべて16世紀末～17世紀初頭、17世紀末～18世紀初頭、18世紀末～19世紀初頭頃の長期間にわたる遺物である。

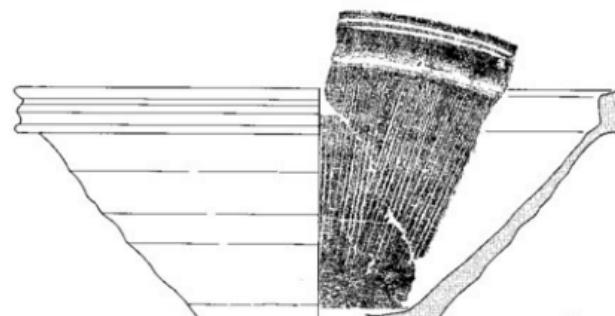
施釉陶器 56は肥前系の皿であり、底部を欠損する。17世紀末～



第23図 E地区 近世堆積層出土遺物 (1)



63



64

0 20cm



65

0 20cm

第24図 E地区 近世堆積層出土遺物(2)

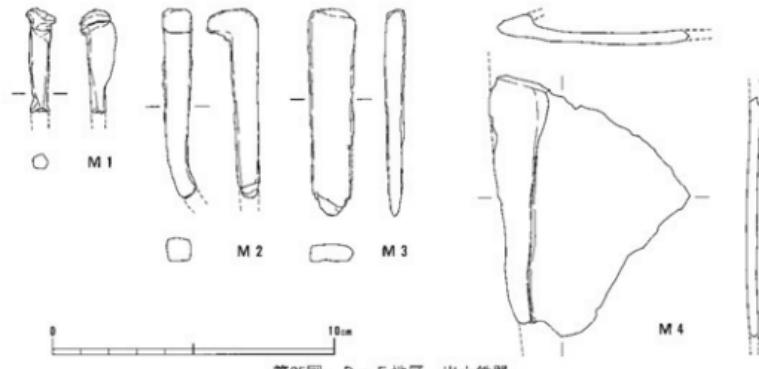
18世紀前半のものである。口径は24.4cmである。57は肥前系の碗であり、高台およびその内面は露胎である。高台内側に「新」の刻印がみられる。58は肥前系の呂器手の碗で、高台疊付は露胎。透明釉を施し、胎土はクリーム色を呈する。17世紀後半～18世紀初頭のものか。口径は9.3cm、器高は7.3cmである。59は産地不明の蓋である。天井部にトビガンナによる施文がみられる。釉は天井部のみにかけられ、黄味を帯びたオーラー色を呈する。19世紀の所産であろう。図化しなかったが、16世紀末～17世紀初頭に位置づけられる唐津焼皿の底部片2点や、国産と思われる天目茶碗1片などが出土している。

無釉陶器 60は備前焼の徳利である。肩部の刻印下半が残存している。61は丹波焼の鉢である。口縁端部の数カ所に打撃による小さな欠損がみられるため、煙草盆として機能していたと思われる。体部外面に自然釉が付着している。外面を回転ナデにより仕上げ、外面の体部下半には回転ヘラケズリがみられる。口径は11.2cm、器高は6.1cmである。62は産地不明の擂鉢の口縁部の破片である。直立する口縁部をもち、内面に1条、外面に2条の四線状のくぼみが巡っている。内面の櫛の単位は不明である。63は丹波焼の擂鉢である。口縁部外面に鉄泥漿を塗布している。7本単位の櫛による擂目がみられる。17世紀中頃。64は丹波焼の擂鉢である。7本単位の櫛による擂目がみられる。18世紀中頃に位置づけられる。65は丹波焼の甕の口縁部の破片である。口縁部内面に溶着がみられる。口縁部の形態などから17世紀前半の所産とみてよいと思われる。

なお図化しなかったが、16世紀代頃の備前焼大甕の底部片が1点出土している。

磁器 磁器は図化していないが、青磁片や、白磁の型打ち出しによる水滴1片などが出土している。

9. D・E地区出土鉄器



第25図 D・E地区 出土鉄器

鉄製品は5点出土し、性格不明の小片を除く4点を図化した。M1はC地区の上層遺構面の直上より出土し、その他はE地区の近世堆積層からの出土品である。

M1は断面方形の角釘である。身部の幅、厚さはともに0.5cmを測る。いわゆる頭巻釘で、頭部の幅は1.05cmである。残存長は3.7cmである。

M2はいわゆる折釘である。身部の断面形は一辺0.8cmの方形である。残存長は6.8cmである。

M3は下端に向かって薄くなる鑿である。下端部は劣化が激しい。残存長は7.4cmを測り、幅は最も厚い部分で0.6cmである。

M4は鋤先である。側面の折り返しは欠損している。残存長9.3cm、最大幅7.15cm、厚さ0.4cmを測る。

第5章 まとめ

御坂遺跡は、昭和45年にはすでに周知されていた遺跡であるが、その実態は明らかではなかった。この度、慢性的な交通渋滞解消のため、当遺跡内に県道三木三田線特種・改良一種事業が計画され、これに伴って3次にわたる調査を実施した。その結果を簡単にまとめて本報告の結びとしたい。

御坂遺跡は、山田・淡河両河川の合流点付近の、河岸段丘上に立地する。調査は路線内的一部、1,400m程度である。時期別の遺構の概要は以下のとおりである。

江戸時代 E地区上層遺構面で、多くの遺物とともに屋敷、水田の一部等が認められた。出土遺物の示す時期幅は広く、また種類も豊富である。

鎌倉時代 A地区上層遺構面で杭列を伴った水田の畦畔が確認された。B地区では柱穴や溝が確認され、C地区上層遺構面でも土壙、溝等が検出された。E地区下層遺構面では、比較的良好な一括遺物を含む土壙等が検出された。このように、ほぼ全域において鎌倉時代の遺構が認められたが、その密度は低い。調査区周辺に遺跡の中心部分があるものと推定される。

弥生時代 A地区下層遺構面およびB地区で後期の溝が、C地区下層遺構面で土壙、柱穴が検出された。D地区でも、後期の溝が2本検出され、中期の遺物もわずかに出土している。このように、E地区を除く全域にわたって弥生時代後期を中心とする遺構が出土しているが、竪穴住居など居住に関する遺構は未確認である。鎌倉時代同様、調査区周辺に遺跡の中心部分があると思われる。

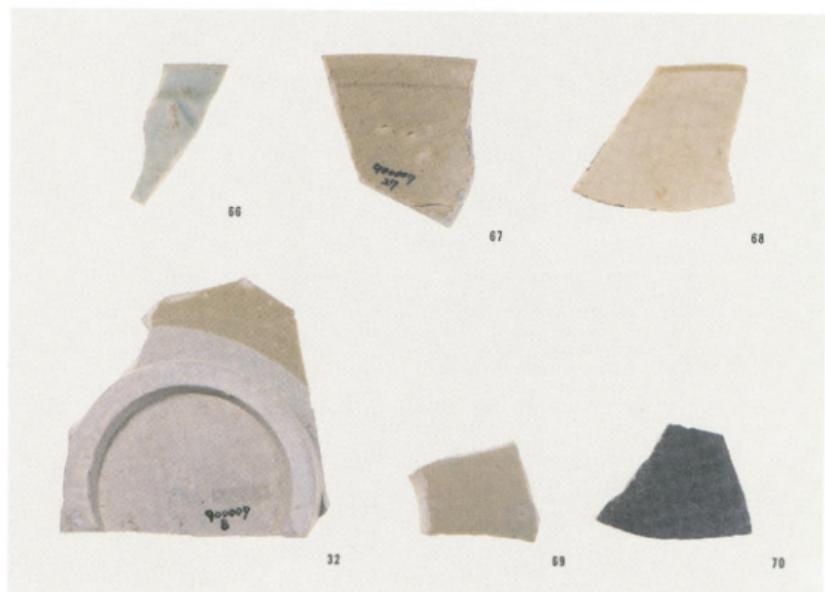
本報告書では、調査結果の全てを記載できたわけではない。特に、遺物の再検討を行う上の便宜を考え、以下に本書掲載遺構の調査時の呼称名を記すこととする。

報告名	旧地区名
A地区	平成2年度 B区
B地区	平成2年度 A区
C地区	平成3年度A区西
D地区	平成3年度A区東
E地区	平成3年度 B区

報告名	旧遺構名	報告名	旧遺構名
B地区	溝 1	溝 2	E地区 土壙 1 SK17
	溝 2	溝 1	土壙 2 SK18
	溝 3	溝 3	土壙 3 SK23
	溝 4	溝 4	土壙 4 SK25
C地区	土壙 1	SK08	土壙 5 SK15
D地区	溝 1	SD101	溝 1 SD04
	溝 2	SD102	

写真図版

カラー図版一 A・B・E地区 出土遺物



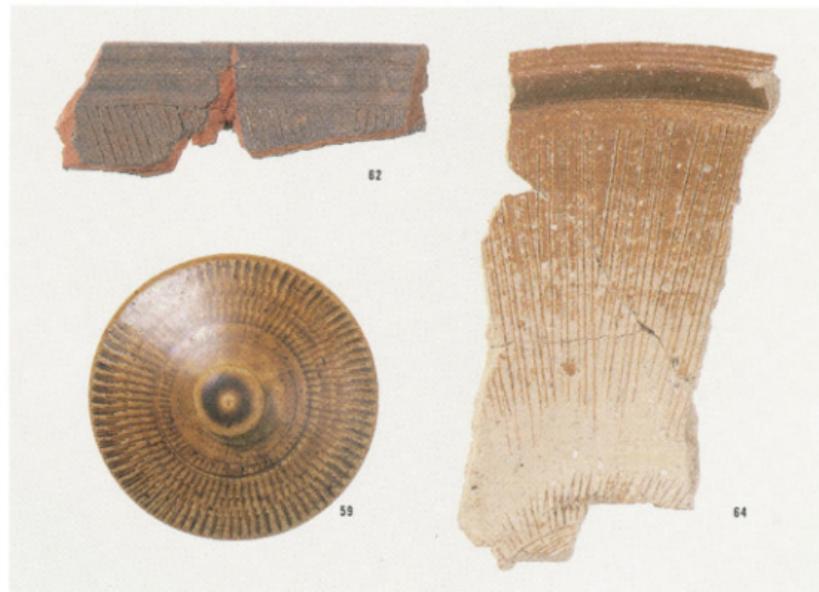
A・B地区 出土遺物



E地区 土壙3・4・5出土遺物

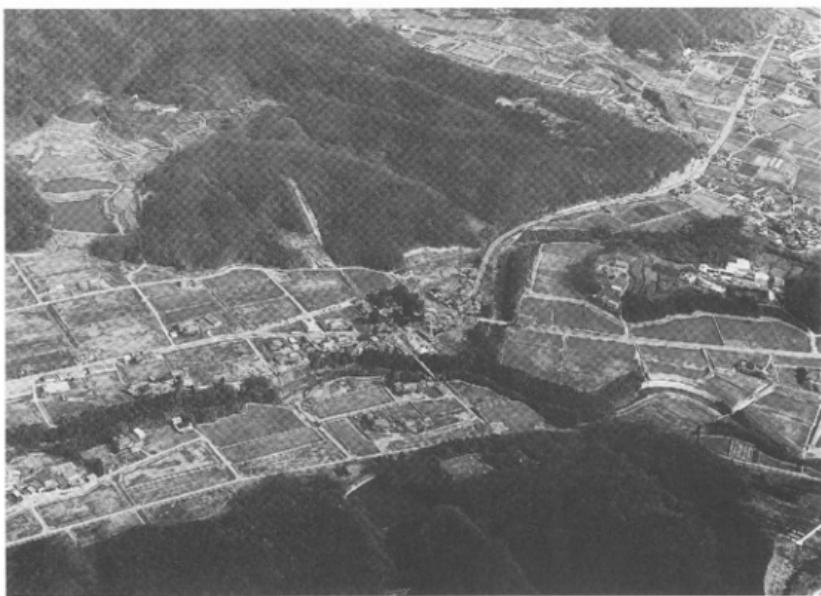


近世堆積層出土遺物（1）



近世堆積層出土遺物（2）

図版一
遺跡の遠景

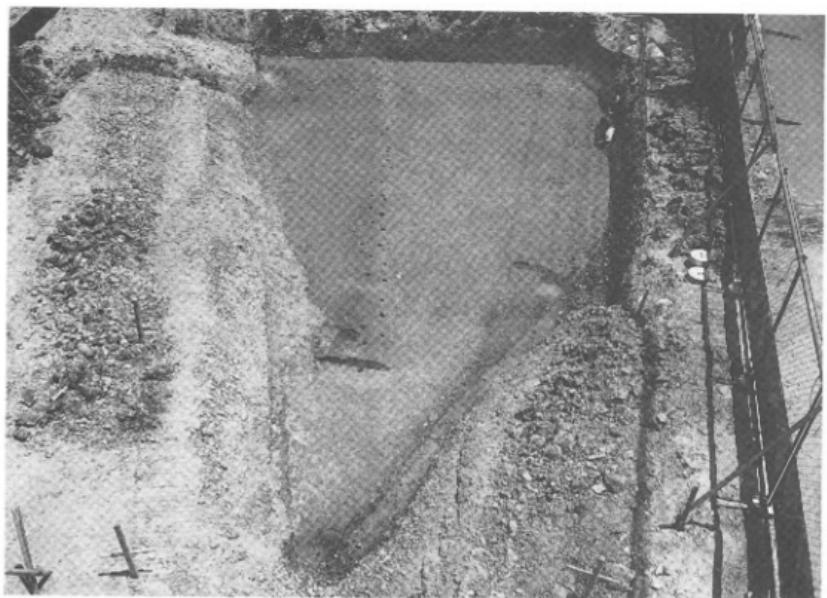


空中写真（南から）

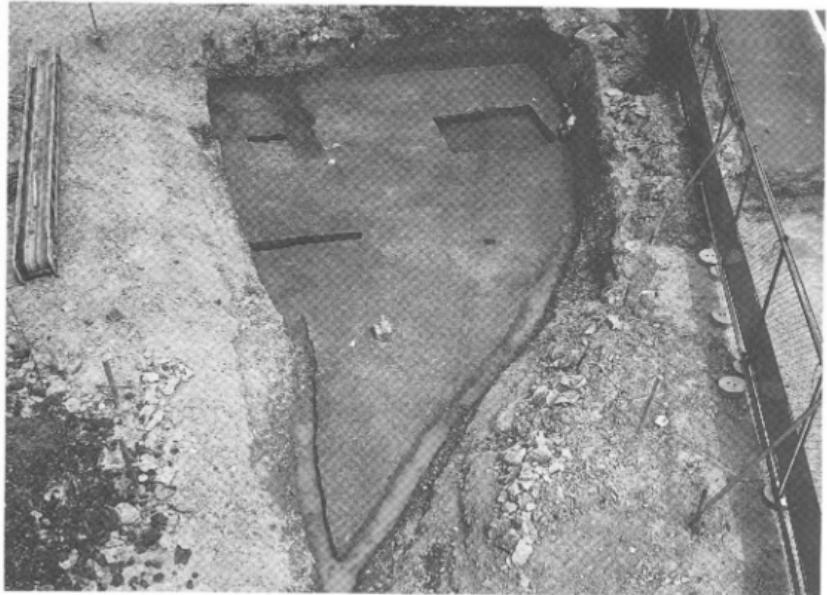


空中写真（東から）

図版二 A 地区
遺構

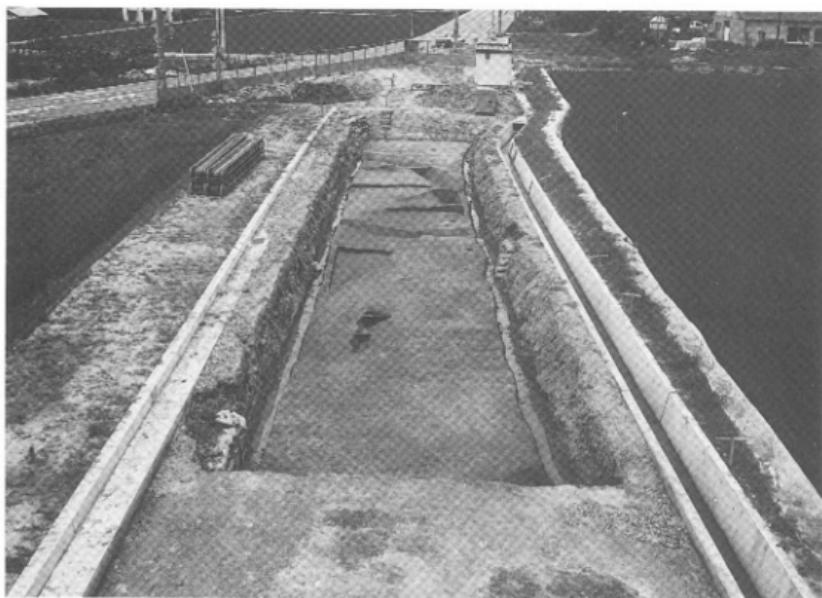


中世遺構面全景（西から）



弥生時代遺構面全景（西から）

図版三
B地区
遺構

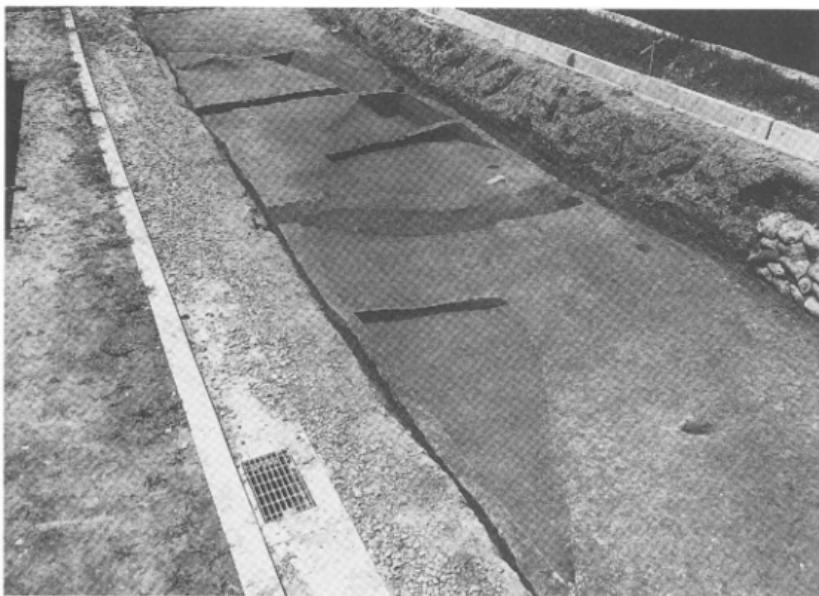


全景（東から）



全景（西から）

図版四 B地区 遺構



溝1（南東から）



溝2（南西から）

図版五 C・D・E地区 空中写真



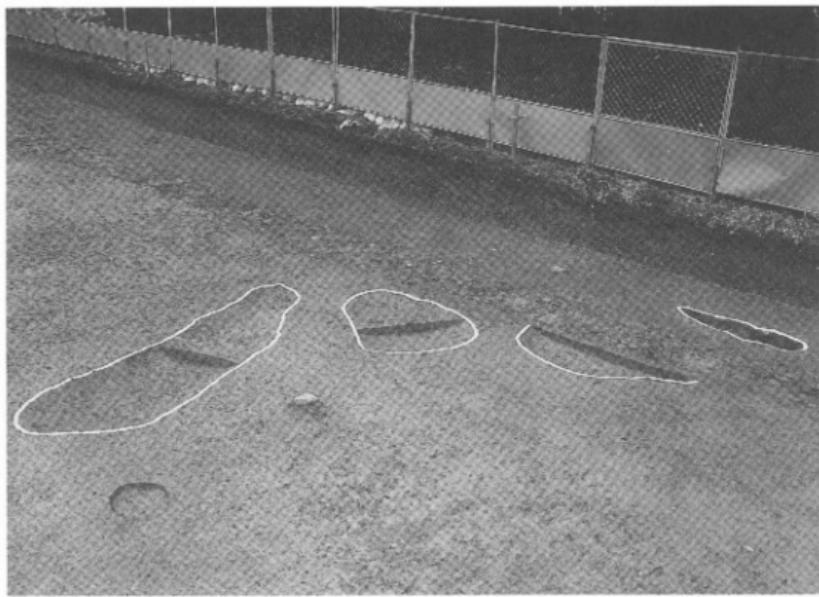
C・D地区全景



E地区全景

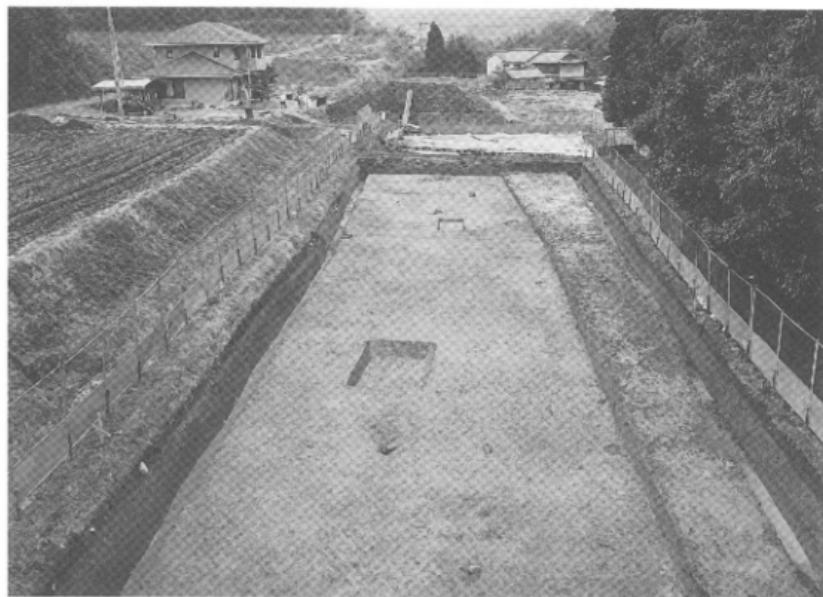


上層遺構面東半部全景（西から）



上層遺構面近景（北西から）

図版七 C地区 遺構



下層遺構面全景（西から）

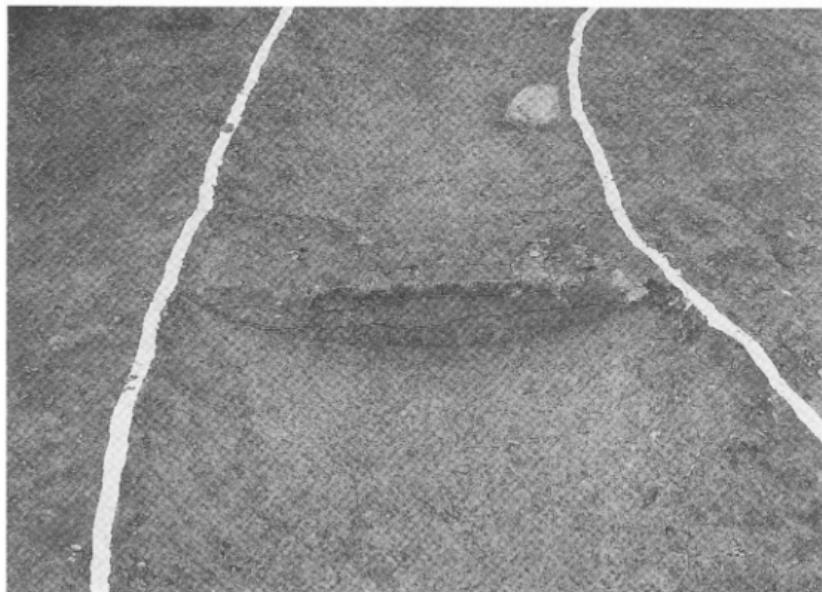


下層遺構面近景（北東から）

図版八
D 地区
遺構

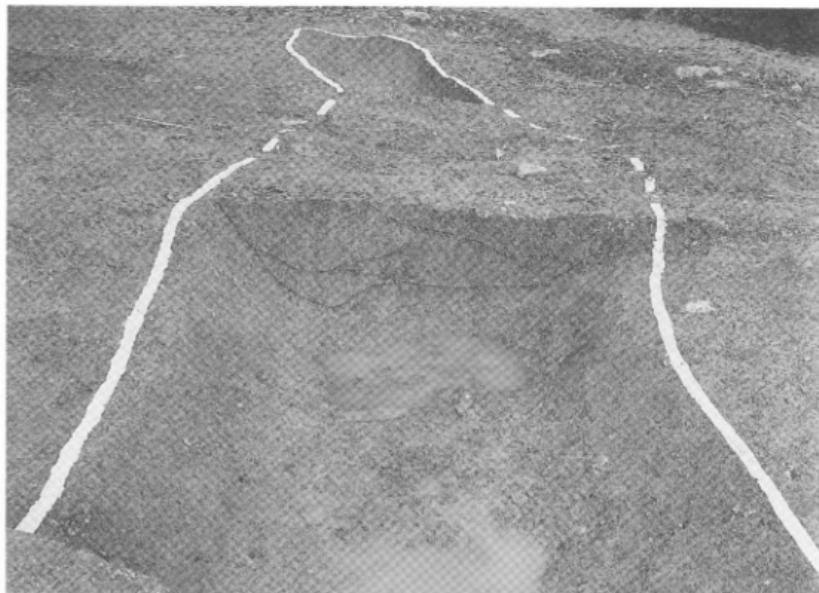


全景（東から）



溝1 土層堆積状況（南東から）

図版九 D・E 地区 遺構

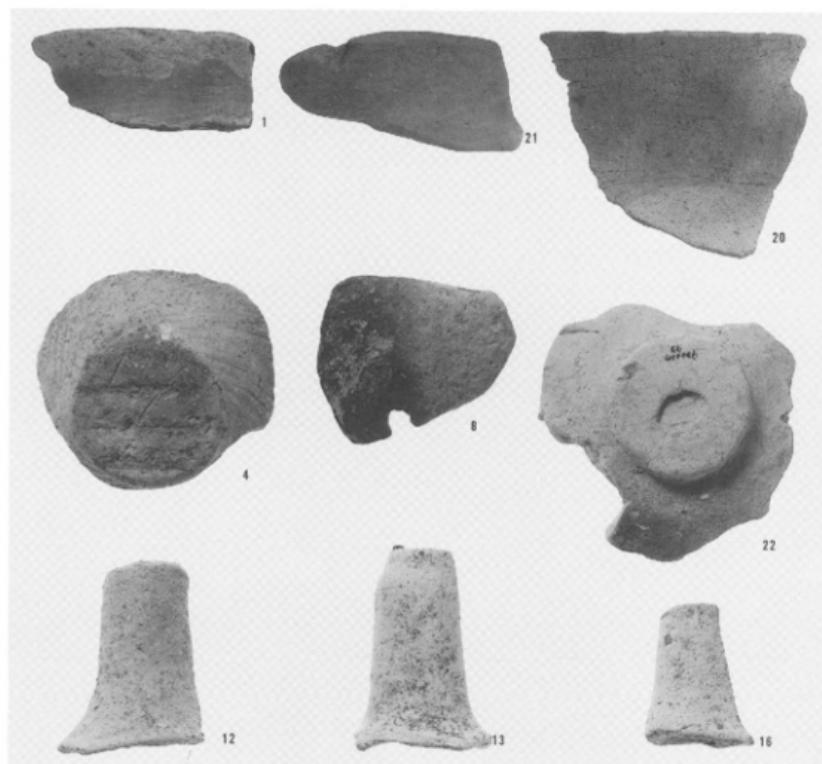


D地区 溝2土層堆積状況（南西から）

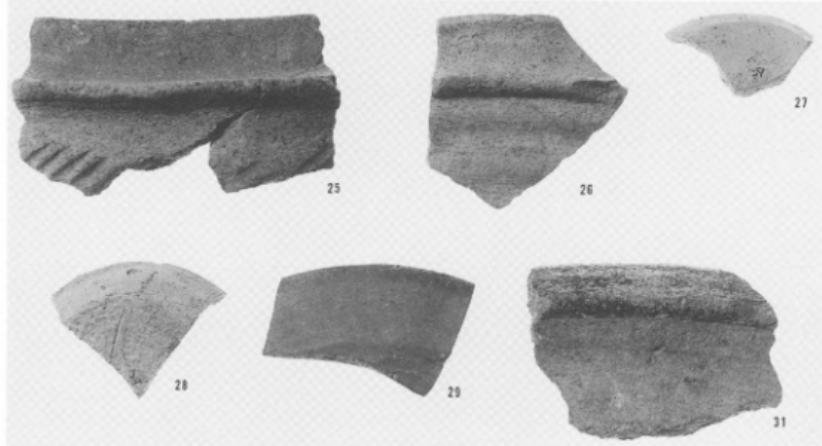


E地区 全景（西から）

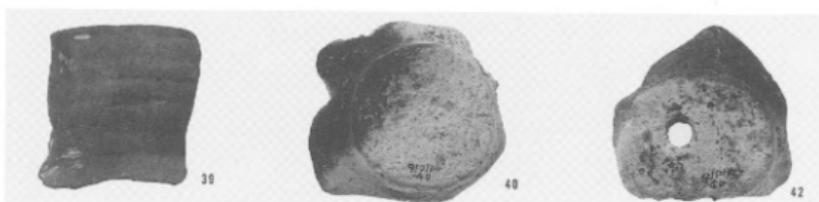
図版一〇 A・B地区 遺物



弥生時代の遺物



中世の遺物

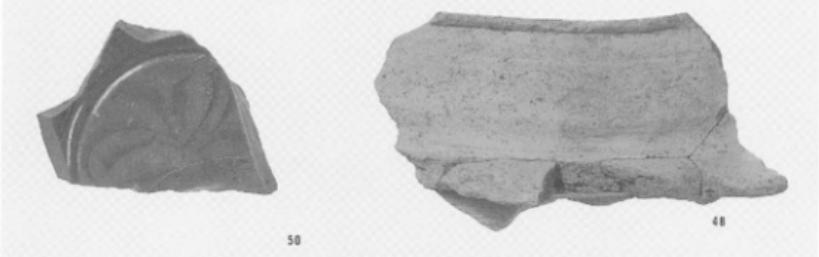


D地区 溝2出土土器



45

47



50

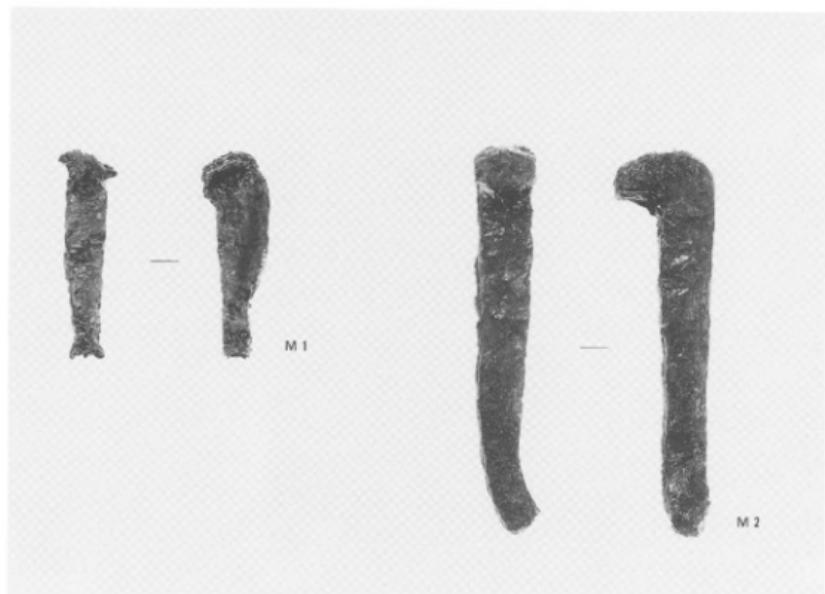
48



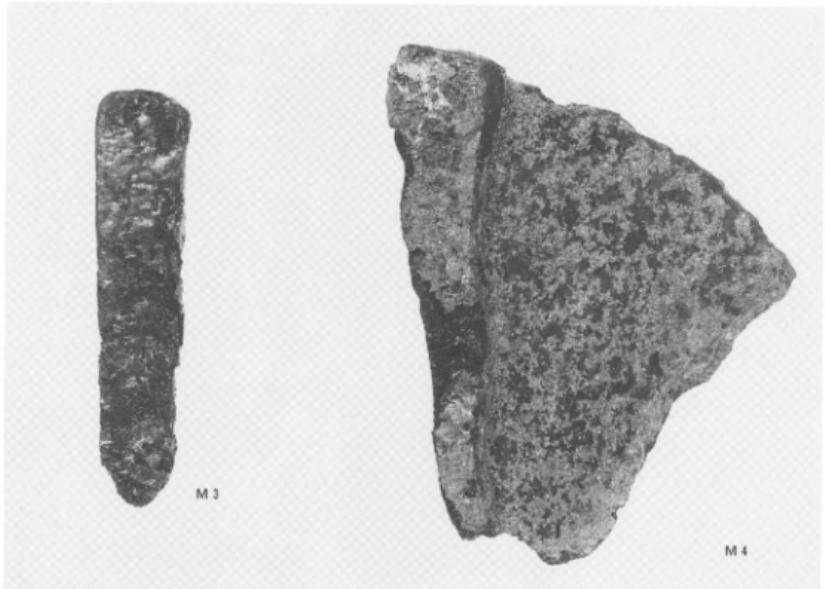
46

E地区 土壙1出土土器

図版一二 C・E地区 遺物



鉄釘



鐵・鉤先

兵庫県文化財調査報告 第132冊

御坂遺跡

—県道三木三田線特殊・改良一種事業に伴う埋蔵文化財調査報告—

平成6年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 梶原出版印刷合資会社

〒657 神戸市灘区城ノ内通1丁目4番13号